

佐藤次高編『イスラームの歴史1 イスラームの創始と展開』（宗教の世界史11）山川出版社2010年

本書は、山川出版社のシリーズ「宗教の世界史」の第11巻目として出版された、イスラームについての概説書である。同社は「世界宗教史叢書」として『イスラム教史』（嶋田襄平著1978年）を世に送り出しているが、今回イスラームについては2巻本（第12巻目が『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』として出版されている）の構成をとり、分量・内容と共に充実させている。この40年強の間に我が国におけるイスラーム理解の重要性と需要の高まりを反映しているものと考えてよいだろう。また前作は嶋田襄平氏が一人で執筆したものであったのに対し、今回のものは専門性を重視して数名の研究者による共著となっている点を強調しておかねばならない。以下では各章の内容を紹介しつつ、適宜評者の意見や感想を述べていくことにする。

序章「イスラームの過去・現在・未来」は、編者である佐藤次高氏が担当する。「知と文明の創出」という小見出しで始まる本章は、まずイスラーム文明が先行文明の「知」を熱心に獲得しようとしていたことを指摘し、高度な学問体系や都市文明が存在したことを述べる。そして、「近代」との出会いでは、イスラーム世界が直面した危機的状況とその打開に向けた試み、そしてその試みが十分に達せられていないことを指摘する。さらに未来に向けての試練では、近代以降の様々なイスラーム改革運動の存在を指摘し、今後の展開を見守ることの重要性を説いている。最後に、2巻にわたる『イスラームの歴史』の概要を提示して本章を終えている。本章はまさに編者によるイスラーム概観であり、2巻にわたる『イスラームの歴史』の内容の見取り図を示したものであると言ってもよいだろう。

第1章「世界史を変えるイスラーム」も引き続き佐藤次高氏が担当する。本章は表題の通り、イスラームの世界史上位置づけを示そうとするものであり、イスラームの誕生、イスラーム社会の形成、そしてイスラーム文明の形成と拡大という観点から述べられている。全体としては第2章以降の内容を総括し、大枠を示すとともにそれらの諸前提が提示されているという印象であるが、若干気になるのは、イスラームの宗教的特徴についての記述が少なく、また六信五行等の信仰に関する記述が各所にちりばめられる形で示されており、体系的ではない点である。これはイスラームの社会的意義や役割を重視した記述故と思われるが、その分教義の説明などについて物足りなさを感じる。

第2章「ムハンマドの生涯とイスラーム」は、後藤明氏が担当している。本章前半はムハンマドの生涯を中心とし、後半はムハンマド死後の信徒集団による国家形成についての詳細が述べられる。特に前半の傾向として、アラブ民族あるいはクライシュ族に、中心的な役割を果たす「長」の存在がなかったという記述が目立つが、これこそ後藤氏の数十年来一貫した主張として明記されるべきものである。また後半ではアラブの大征服に絡めて、アラビア半島各地から集結したアラブ遊牧民の仲間意識の形成にイスラームという信仰が多大な役割を果たした点が強調されている。第2章の特徴としては、嶋田氏の前作と比べてもやはりイスラームの教義や信仰面での記述は少なく、その分前章と同様にイスラームの歴史的、社会的側面が重視された記述となっていることであろう。

第3章「生活の指針シャリーア」は堀井聡江氏が担当している。イスラーム法と法学を扱うこの章の存在こそが、本書の価値を大いに高めているものと評者は考える。まず、シャリーア（イスラーム法）とフィクフ（法学）の概要が述べられ、基本事項を確認している。ここで重要なのはシャリーアが不文法であるという指摘と、成文法（制定法）中心の法の理解は見直されるべきと述べている点である。

次に堀井氏は法学の誕生とその発展の歴史的経緯について述べ、初期の法学が伝承主義に傾いていく傾向を明らかにする。また法学理論の形成との関係に限定しているが、イスラーム神学の理論の紹介もなされている。この部分、本書を通じて唯一神学の内容に触れる部分として注目に値する部分である。ただし、ムータズィラ派公認についての評価を「時のカリフが法学者になり代わり宗教的問題に口を出したかっただけ」であり、「そのためムータズィラ派の説は大衆的な支持を得られず、カリフの威信が傷つきそうになると、公認は取り消された」としているが、これは単純化に過ぎよう。事はそう単純ではなく、宗教に関する事柄におけるカリフの権限強化、あるいはカリフの権威の絶対化と絡めて論じる問題であるので、カリフが思いつきで行動していたかの如く語るのには誤りであろう。

第3章後半では、シャリーアの完成とスンナ派四大法学派成立の経緯と特徴、そしてシャリーアの適用の具体例としてオスマン朝期の事例を紹介している。ただ本章最後の部分で、イジュティハードの所産として、脱法行為もまたシャリーアを成り立たせる要素としている点には、少し違和感を覚えた。「脱法行為」がシャリーアを現実の状況に適合させようとする上での行為とはいえ、やはり譲れない部分、越えられない部分もあろう。その点も強調すべきではないかと感じた。

第4章「スンナ派とシーア派の活動」は、再び佐藤氏が担当する。本章では、現在のイスラームの二大宗派であるスンナ派とシーア派の形成、そしてその発展が述べられている。前半では、両派の成立の経緯が示され、続いてスンナ派共同体の長であるカリフについての政治理論の概要と「神のカリフ」観念についての考察がなされる。そしてシーア派についても同様にイマーム論の概要、加えてシーア派内の過激思想派閥の特徴が示される。一方後半では、シーア派国家、スンナ派国家としてそれぞれの宗派を奉じて国家運営を行った諸王朝の政治史や特色が示されている。

やはり国家と宗派の関連での記述が大半を占めるため、両派の信仰や法体系、神学議論などの差異についての記述はなされていない。もう少し両派の思想的な違いを鮮明にする内容が欲しいところである。

第5章「スーフイズムの成立と発展」は東長靖氏が担当している。本書のもう一つの売りがこの第5章である。担当の東長氏は日本におけるスーフイズム（タサウフという表現を用いていないのは編集方針故であろうか）研究の第一人者であり、彼によるまとまった形での、初めての「スーフイズム概説」が本章において示されているためである。その内容はスーフイズムの成立やイスラーム思想全体におけるスーフイズムの位置付け、そしてスーフイズム思想の根幹や思想発展の経緯、またスーフイズム普及の役割を担ったタリーカの問題などが可不足なく、分かりやすく描かれており、入門として最適なものとなっている。

また興味深いのは、従来のイスラーム研究で取り上げられてきた「スーフイー対ウラマー」という構図は限定された地域と時期においてのみ合致するものと理解すべきであるという見解およびそれを裏付ける考察である。特に反スーフイズムの急先鋒であるイブン・タイミーヤ（1328年没）の影響力は、当時においては殆ど存在せず、近代以降になってその反スーフイズムの思想が再評価されたという説明は大いに頷首できた。

しかし若干不足を感じた点もある。スーフイズムを「深遠な形而上学から怪しげな民間信仰まで幅広い領域に関わる現象」とし、スーフイーを「叡智を持つ哲学者、奇跡を起こすありがたい存在、「山法師」の如き政治的圧力団体の成員、「乞食坊主」的ならず者」まで様々な存在であるとしていたが、「怪しげな民間信仰」としてのスーフイズムや「政治的圧力団体の成員やならず者」としてのスーフイーについての言及は殆どなかった。スーフイー、スーフイズムのこの側面についての研

究の進展を期待したいところである。

第6章「イスラーム世界の拡大と深化」は堀川徹氏が担当している。本章では、イスラームの信仰が世界各地に広がり、定着した要因を、トルコ民族の征服活動、ウラマーや商人の移動、そしてスーフイズムの活動の三点に集約し、説明している。アラブの大征服はアンダルスから中央アジアまで達したが、トルコはこれをアナトリアやアフガニスタン、インドへと広げ、イスラームの領域拡大に多大な貢献を行った。また11世紀以降イスラーム世界の大半の地域ではトルコ系の君主が政治権力を握り、軍事を司るなど、トルコのイスラーム世界における役割の高さが指摘される。またウラマーやムスリム商人の学問あるいは利益追求のための移動はやはりイスラームの信仰の定着や拡大に大きな役割を果たし、スーフイズムやタリーカはイスラーム受容以前に有していた各種の信仰を、イスラームの文脈に読み替えて、それを保証したとして、やはりイスラーム定着に大きく貢献したとする。本章の内容は、それまでの章でなされた議論を踏まえたものになっており、本書の総括的な位置付けとして、すんなりと理解することができた。

以上、各章の概要を示し、所々評者の疑問点を述べてきた。これを踏まえて、以下では本書の内容について、評者の思うところを述べることにする。本書は嶋田氏の前作に比して、シャリーアとスーフイズムの概説に大きく頁を割いた点、また前作が歴史学者一人による執筆であったのに対し、本書は3人の歴史学者に加え、法学と思想の専門家を擁した執筆陣による点が大きな特徴として挙げられる。これにより、より広範な視点から高い専門性を有した内容を提供することが可能となったからである。特にスーフイズムに関しては、評者の怠慢であるという誹りを甘んじて受けるにしても、はじめて体系的にスーフイズムを学べた、というのが正直な読後感である。また法学についても、その成立と発展の経緯が政治史や神学理論の発展と絡めて説明されており、前作よりもはるかに分かりやすい内容であった。また、この「宗教の世界史」シリーズの方針が、単なる宗教の通史ではなく社会とのかかわりを重視した内容を提示する、というものであることから、本書を通じて、国家や共同体あるいは社会との関係でイスラームの歴史が概観されているが、これも方針に沿ったものとして成功しており、また共著であるにも拘わらず、全体の統一性もとれているといえるだろう。

ただし、若干気になる点もある。まず、シーア派に関する記述が少ない点である。本書では第4章の2-3節において、シーア派の信仰や教義、あるいはシーア派国家の概要がまとまった形で述べられているが、第3章ではコラムにおいてのみシーア派の法学が扱われ、第5章でも神秘主義哲学のシーア派との結び付きの項で触れられるのみである。また書評の対象ではないが『イスラームの歴史2』ではシーア派に関する記述はほぼ皆無であり、このシリーズでのシーア派軽視は明らかであると言えよう。

ムスリム総人口の1割程度とされ、少数派であるシーア派ではあるが、イラン・イスラーム共和国の存在、あるいはイラク南部やレバノンのシーア派の活動など、現代中東政治を考える上でもシーア派の重要性は高いと思われる。18-19世紀辺りで巻を区切っている関係上、本書でのシーア派の記述に、その現代的意味にまで言及することは望むべくもないが、この点改善の余地があるように思う。

次に、国家や社会との関わりを重視するあまり、信仰や教義、その他思想面での記述が少ないことにも不満が残る。既に第1章のところで指摘したが、根本教義とされるタウヒード（神の唯一性の表明）と六信五行の信仰対象や信仰行為についての説明がまとまった形では示されておらず、しかも随所で行われる説明も簡便なものである。だが宗教の歴史としてイスラームを取り上げる以

上、例えば六信五行がムスリムの信仰の対象や行為となっていく経緯についての説明がなされるべきだったのではないだろうか。

また神学、そして哲学などイスラーム思想上の重要な分野に対して頁が割かれていない。尤もこの点は既刊である『ユダヤ教の歴史』や『キリスト教の歴史1、2』も同様の傾向であるので、シリーズの方針の問題であるかもしれない。しかし、特に神学はムスリムの信仰の問題を扱い、世界観や他宗教観など、現実の社会に関わる分野であると思われるので、この点もう少し体系的な記述が欲しかった。なお蛇足ながら、巻末の附録は質・量ともに充実しており、特に歳時暦の項は必読である。

以上、充実した内容を有する本書に対して、わずかな瑕疵に難癖をつけ、雑駁な感想を述べてきたが、本書の内容が最新の研究や長い学究に裏打ちされたものであることに変わりなく、最新のイスラーム概説として一読に値する書物であることを最後に強調し、擱筆する。

(橋爪 烈 日本学術振興会特別研究員 (PD))

小杉泰編『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』山川出版社、2010年

山川出版社の「宗教の世界史シリーズ」全12巻の1冊である。このうちイスラームには2巻が割り当てられており、『イスラームの歴史1 イスラームの創始と展開』（佐藤次高編）に続き、近現代を扱う巻となっている。

キリスト教やヒンドゥー教も含む本シリーズは、「人びとの生活に息づく信仰に踏み込み、地域的な広がりにも着目する」と謳っている。実際、この巻は、限られた紙数の中で、人間生活の多様な領域や地域性のバランスをうまくとって構成されている。計6名による分担執筆だが、1冊のまとまった読み物として仕上げられており、イスラーム世界の動向に関心をもつ読者に推薦したい。近年のイスラーム地域研究の成果もふんだんに盛り込まれており、イスラームの研究者もこの本を通読することで、自らの作業をイスラーム研究全体の中で再確認できるだろう。

まず、巻頭のカラー写真が目を引く。新生児の命名式（パキスタン系イギリス人）、割礼祝いの正装をした兄弟（イスタンブール）、金曜礼拝の説教を聞く信徒たち（中国青海省）、モスクの文様を修復する芸芸家（イェルサレム）、女性ダンサーたち（マスカット）などなど。カバー裏にも色鮮やかな衣装をまとったアフリカ系の女性たちが配されている。多種多様なムスリムの生活を活写したもののだが、「このような写真は初めて見る」という読者も多いことだろう。筆者が特に気に入った一枚は、マレーシアの女子高生たちである。ランの花柄をあしらった制服と、キャプションとして附された「3人の娘を育て上げた親は楽園に入る」とのハディース（預言者言行録）がことのほか印象的である。イスラームと聞くと、紛争や対立、女性への抑圧を連想してしまう私たちの固定観念をゆさぶる仕掛けとして、巻頭の写真が配されているのだろう。最初に同時代を生きるムスリムたちの写真をじっくり見ることで、彼らの歩んできた近現代史を読み解いていくことへの期待が増幅される。

本文目次を見ていきたい。

- 第1章 近代と邂逅するイスラーム（小杉泰）
- 第2章 イスラームの再構築（小杉泰）
- 第3章 スーフィー教団の革新と再生（東長靖）

第4章 アフリカに拡大するイスラーム(坂井信三)

第5章 中央ユーラシアの変容と波動(小松久男)

第6章 南アジア・イスラームの動態(山根聡)

第7章 東南アジア・イスラームの展開(小林寧子)

第8章 グローバル化時代のイスラーム(小杉泰)

まず、編者である小杉泰氏の担当する第1、2章において、思想自体の持つ力(革新性といっても言いだろう)、思想を伝播させるツールとしてのプリントメディアの活用、その帰結としての政治・社会運動や教育の活性化が骨太に提示される。続く第3章では、歴史上イスラームの主流をなしてきたスーフィー教団の革新と再生が描かれ、これによって全体の枠組が提示される。第4～7章の各地域の執筆者が、この前半部に呼応して記述を進めているので、地域の事例に即しながら、歴史の大きな流れを把握することができる(章によっては数百年にわたる変遷を扱うため、以下の記述は、印象に残った点をピックアップするという形となっている。了解いただきたい)。

第1章「近代と邂逅するイスラーム」は、ワッハーブ運動の改革思想から始まる。そして、18世紀アラビア半島で始まったこの運動と同時代的に共振したものとして、シャー・ワリーウッラー(南アジア)、十二イマーム派のピフバハーニー(イラン)、ザイド派のシャウカーニー(イエメン)、ウスマン・ダン・フォディオ(ナイジェリア)らの活躍が列挙される。近現代のイスラーム世界はさまざまな課題に直面し、解釈の革新を必要としたが、その思想的な原点を提示するにあたって、地域や宗派の観点から複眼的な記述がなされている。一地域の事例でイスラームを代表させるのではなく、さまざまな地域の複数の事例を通じて、大きなうねりが作り出されていたことを読者に伝えている。第1章は、さらにアフガーニーとパン・イスラーム主義、国際雑誌としての『固き絆』、『マナール』(1898-1935)の重要性を指摘して締めくくられる。そして、第2章では、大衆運動の到来を告げたムスリム同胞団へと話は進んでいく。後半では、モスク建設や喜捨といった草の根レベルにおける社会的活動と、法学的な活動が取り上げられている。古典文献への「追従」を乗り越え、イスラーム法の現代化を目指した思想家たちにとって、「イジュティハード」(解釈の営為)はきわめて重要なテーマであったのであり、本書全体においてもキーワードとなっている。

第3章「スーフィー教団の革新と再生」では、ヨーロッパ植民地主義の衝撃のもと、スーフィズムやタリーカはどのような変革を遂げたのか、前章に登場する人物や時代状況を踏まえつつ論じている。たしかに近代においてスーフィズムやタリーカ、ならびに聖者信仰はイスラームの内部において批判の対象となったが、その内実がきわめて多様だったことを、本章は多くの事例を挙げて説明している。また、近代になって批判にさらされたスーフィズムが変質を遂げたとするネオ・スーフィズム論について、思想の変質という観点からは無理があるとしつつも、組織形態として斬新なタリーカ(一例としてティジャーニー教団)を併せて紹介するなど、学説的な展開もコンパクトにまとめている。なお『イスラームの歴史』において、東長氏は1巻と2巻の両方で執筆しているため、この文章は独立したものであるが、1巻第5章「スーフィズムの成立と発展」の続編としての色彩が強い。第1巻では、スーフィズムが哲学から民間信仰までを含む重層的な展開を遂げつつ、いかにイスラームの主流となっていったかについて述べ、基本的な概念群を提示している。こちらを読んだうえで臨めば、本章の理解度も一段と高まるはずである。評者が面白いと感じたのは、普遍宗教の主張に連なる今日的なスーフィズムの動きも、最後に収めている点である。欧米人の改宗ムスリムや移民のスーフィーたちが織りなすグローバル化の最前線では、「これはイスラームの一

線を越えているのでは」という思想が展開されている。しかし、第1巻と併せて読むとき、実はそのような放逸さを含むものとしてスーフイズムは常にあったであろうことに思い至るのである。

第4章「アフリカに拡大するイスラーム」では、アフリカを西アフリカ、インド洋岸のスワヒリ地方、そして南部アフリカの3つに分けて話を展開している。東では19世紀前半に、オマーンの勢力が展開した海上交易によって、経済的繁栄がもたらされた。そして、その中心となったザンジバル島は、新たに宗教学者の集合する学問センターとなっていった。西では、植民地支配状況において、カリスマ的なスーフイーたちが活躍した。アマドゥ・バンバ(1850-1927)が率いるムリーディー教団が代表的な事例として取り上げられている。短いながらも興味深いのは、南部アフリカにおけるムスリム・コミュニティの形成である。17世紀、オランダ東会社がケープをアジアの植民地の政治犯の流刑地として利用したことで、「ケープ・マレー」と呼ばれるムスリムの集団が成立していった。19世紀になると、今度は開発のためにインド人労働者が送り込まれた。そして、その中に含まれていたムスリムが第二の集団を形成していったのである。第3章に続いての本章からは、現代社会においてスーフイー教団の有する活力をはっきりと確認することができる。

第5章「中央ユーラシアの変容と波動」においても、近代におけるイスラームの改革が、カイロ発の『マナール』誌等によって触発されつつ、まずは新方式学校と定期刊行物の普及によって活性化したことを伝えている。しかし中央アジアのムスリムの歴史は、長期の社会主義体制を経験したことで独特なものとなっていく。とりわけスターリン時代のソ連においては、戦闘的な無神論が宣伝されるなど国内で抑圧されただけではなく、海外のイスラーム諸国からも隔離されてしまう。世俗化したソヴィエト社会において、割礼や葬儀などの民族的な伝統としてのみ、イスラームは存続したのである。このような歴史的経緯を踏まえるとき、1980年代末以降、「慣行に墮してしまっただけのイスラームの現状」を厳しく批判し、かつきわめて政治的なスタンスをとるワッハービーがなぜ中央アジアにおいて勢力を拡大していったかを、読者は深く理解することができるのである。

第6章「南アジア・イスラームの動態」(山根聡)は、シャー・ワリーウッラーから、アフマド・ハーン、デーオバンド学派、ヒラーファト運動、そしてイクバル、ジンナーへと展開していく。ウルドゥー語紙の普及がもたらしたムスリム意識の活性化を論じ、またパキスタンの建国詩人と謳われるイクバルの詩を織り込むなど、ウルドゥー文学を専門とする山根氏自身の研究の特徴をうまく生かした構成となっている。ただし、この章では、現代インド・ムスリムの動向に触れるところが少ないように感じる。本章の冒頭で触れられている「二重の周縁化」により、日本のイスラーム研究にはインドが、インド研究にはムスリムへのアプローチが、その対象の巨大さに反比例して大きく欠落しているのである。この部分は今後は正していかなければならないだろう。南アジアのムスリムを研究する者として、評者自身そのように反省する次第である。

第7章「東南アジア・イスラームの展開」では、海域ネットワークで結ばれていたムスリムが、設定された植民地支配の領域ごとに、いかに異なる対応を示したかを記している。20世紀初頭のインドネシアでは、近代的組織形態のイスラーム運動が展開した。ムハマディヤは1912年にジョグジャカルタで結成され、布教・教育・福祉を中心に活動した。この改革を求め、イジュティハードを推進すべしとする動きに対して、ウラマーの多くは慎重であった。彼らが1926年に立ち上げたのがナフダトゥル・ウラマー(ウラマーの覚醒)である。この二団体が、その後のインドネシア現代史においてきわめて重要な役割を果たしていくことになる。ここでも、『マナール』等による情報発信に刺激を受けつつ、地域の課題に対応していったムスリムの姿を確認することができる。

第8章「グローバル化時代のイスラーム」は再び小杉氏の担当であり、1970年代以降の動きを扱う。

すでに第1、2章において、イスラーム復興と呼ばれる現象はコンパクトかつ多角的にまとめられていたが、ここではその現代的な進展・深化を取り上げている。具体的には、人権と民主化を核とする現代思想、イスラーム銀行の発展、イスラーム諸国機構(OIC)の活動などである。移民やジハード主義についても詳しく触れている。

この本を通読することで、評者は、近現代におけるイスラームの動向を、もう一度じっくりと確認する機会を得ることができた。思想を軸に展開する歴史というコンセプトも斬新に感じられる。近現代史におけるスーフィズムやタリーカの動向を、具体的かつまとまった形で知ることができたのも収穫である。欲を言えば、21世紀という時代において、さらに大きな役割を果たしていくであろう NGO について、もっと書き加えて欲しかったところである。イスラームの価値観に基づいて、緊急支援、医療、教育、環境などの分野で活動する NGO の数は決して少なくはない。イスラーム復興の社会的重要性とその多様性をより具体的に考えようとするときに、貴重な材料を提供してくれるだろう。

2011年2月現在、チュニジアに始まった民衆の行動は、中東に大きなうねりをもたらしている。評者は、一方でBBCのニュースにかじりつきながら、本稿をまとめた次第であるが、遂にムバラク大統領が辞任を表明した。この大変動を理解するうえでも、イスラーム世界の近現代史についての知識は必須である。専門的な知識を、コンパクトにかつ噛み砕いた形で提供してくれる本書は有益な参考書となるだろう。

(子島 進 東洋大学)

Oroub El-Abed. 2009. *Unprotected: Palestinians in Egypt since 1948*. Washington D.C. : Institute of Palestine Studies, xxiii + 253 pp.

本書は、パレスチナ難民支援の現場に長年かかわってきた実務家兼研究者によって書かれた、エジプト在住のパレスチナ人に関する初の包括的な研究レポートである。著者のエル＝アベドは、ヨルダン政府パレスチナ関係庁や、世界銀行、国連などでイラクおよびパレスチナ難民に関わる業務に携わった後、ヨルダンのフランス中東研究所(IFPO)¹⁾で研究員を務め、現在はジュネーブの国際開発研究の大学院に在籍している。本書のもととなる調査は、著者がカイロ・アメリカン大学で講師として教鞭をとる傍らで、2001年から2003年の間に実施された。つまり本書は、移民・難民の生活を支援の現場と研究の両側面を知る立場から捉えた一冊といえる。

エジプトに住むパレスチナ人の存在は、これまで注目を浴びることが少なかった。その人数を正確にとらえた統計は存在しないが、様々な推計は2000年時点で約7万人という数字を示している(p.6)。彼らが注目されてこなかった理由は、こうした人数がパレスチナ難民の人口全体に対して占める割合が比較的小さいことに加え、エジプトがパレスチナ難民の支援機関であるUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の管轄地域から外れていることの影響も大きいと考えられる。ヨルダン、レバノン、シリアといった他のアラブ周辺諸国と異なり、難民の定着を恐れたエジプトは、自国内でのパレスチナ難民に対する国連の支援を要請しなかった(p.36)。その結果、難民の保護はエジプト政府およびPLO(パレスチナ解放機構)をはじめとする国内のパレスチナ関係の諸組

1) シリアのダマスカスとアレppo、レバノンのベイルート、ヨルダンのアンマーンに施設を構えるフランスの研究所で、正式名称は *Institute francais du Proche-Orient*.

織に委ねられ、国際的なレベルでの関心の対象とはならなかった。

そうした中で、数少ない先行研究の例を挙げるなら、エル＝アベドも引用しているローリー・ブランドやサーリー・ハナフィーによる著作が、まずは重要といえるだろう。前者のブランドはサザン・カリフォルニア大学国際学部の教授で、中東・北アフリカ地域における人の移動と国家との関係について研究を続けている。その中で著書『アラブ世界のパレスチナ人』[Brand 1988]は、エジプト国内でのパレスチナ人による学生組織や労働組合などの組織形成と自立への努力を描いたものである。後者のハナフィーは現在ベイルート・アメリカン大学の准教授で、2000年代前半にはパレスチナ自治区ラーマッラーの研究機関シャムル(Shaml)²⁾の代表を務めた。彼は社会学者として、パレスチナ人の越境移動と、彼らが築く社会的ネットワーク、アイデンティティの関係などについて研究をおこなってきた。エジプトのパレスチナ人に関する著作は、シャムル時代の共著である[Hanafī 1996]。

またエル＝アベドが取り上げていない著作を挙げるなら、エジプトに内容を特化したものではないが比較上の参照となるものとして、ヘレナ・L・シュルツ、およびドンナ・アーツの著作が挙げられる。これらは1990年代以降の中東和平交渉の開始を受けて執筆されており、各地における難民問題の現状分析と提言を備え、エジプトにおけるパレスチナ難民の問題の帰趨にも一部で言及したものである興味深い[Shultz 2003; Artz 1997]。

エル＝アベドの著作はこうした先行研究と比べても、エジプトのパレスチナ人社会を特化して扱い、多様な側面を網羅したという点で画期的である。研究手法の柱としては、カイロを中心とした複数の行政区でパレスチナ人に対する聞き取り調査を実施しており、本文中で多く引用されるインタビュー記録が論述の内容を豊かに肉付けしている。評者自身も同様の調査手法によりヨルダンとパレスチナ自治区で調査を行った経験から実感することだが、長期化した紛争構図の中で移動を強いられた人々のおかれた社会的・法的立場は、想像をはるかに超えて複雑なものである。これらが的確に分析され、政情や歴史的な文脈に位置付けて整理されているところに本書の魅力はある。

しかし、当初はこうした聞き取り調査のみを構成要素に予定されていたエル＝アベドの研究は、予期せぬ事情により変更を迫られることとなる。聞き取り調査はカナダの国際開発研究センター(IDRC)³⁾の助成のもとづき、カイロ・アメリカン大学の「強制移民・難民研究(FMRS)プログラム」⁴⁾の後援で開始された。エジプト政府からは必要な許可が取得され、15行政区で約300世帯を対象に約7か月の期間で実施される予定だった。しかし実際には、わずか2カ月半を終えた時点で、調査は突如中断を迫られることになったのである。エジプト政府が通達したのは「治安上の理由」だった。その結果、聞き取り調査はカイロ、カリュービーヤ、シャルキーヤを中心とした一部の地域のみで実施され、わずか80世帯を対象とした事例を得て幕を閉じることになった。富裕層や中産階級は対象に含まれず、サンプル数の少なさから質的調査としてもその代表性は乏しいものになってしまった、とエル＝アベドは序章で述べている(pp. 6-9)⁵⁾。

2) Palestinian Diaspora and Refugee Center (パレスチナ・ディアスポラ・難民センター)が正式名称。略称のシャムル(Shaml)はアラビア語名称。

3) IDRC=The International Development Research Centerは、カナダ議会により設立され、世界各地の途上国社会へのエンパワーメントを行なう機関で、レバノンでは最大規模のパレスチナ難民に対する奨学金供与なども行なっている。

4) 正式名称はThe Forced Migration and Refugee Studies Program at the American University in Cairo.

5) 調査を終えた後、エル＝アベドはカイロ・アメリカン大学との契約を満了するまで滞在を許されたが、再入国の許可は下りなかった。

これを補うため、本書はエジプト在住のパレスチナ人について、歴史的な文脈や国際法上の地位など、伏線となる要素を取り上げ、文献資料に基づく分析記述を多く含めることになった。章構成としては、方法論と目的を述べた導入部に続き、第一章ではパレスチナ人がエジプトに到着するまでの経緯を扱い、第二章でエジプト内政におけるパレスチナ人の政治的位置付けを政権ごとに整理している。第三章では主な居住地と居住パターン、国籍取得について述べ、第四章で滞在許可と雇用状況を扱い、第五章で教育・保険・財産権などの経済的権利についてまとめている。第六章ではエジプト政府とPLOの関係について述べられ、第七章では国際法上のパレスチナ人の保護規定が取り上げられ、最終章ではこうした状況に置かれたパレスチナ人が抱くアイデンティティについて論じて締めくくられている。以下では各章の内容について、特に興味深い点をとりあげ紹介していきたい。

第一章ではまず、ガザ地区を中心とするパレスチナとエジプトとの間で19世紀後半頃より存在した、労働者を中心とした人の移動が指摘される(pp.11-13)。カイロ市内で有名なハーン・ハリリー市場は、英国委任統治期にヘブロン(アラビア語名はハリール)から移住したパレスチナ商人にその名が由来するという(p.29, fn)。彼らの一部はエジプトの市民権を獲得し、土地など不動産を購入した。こうした経緯は同じく移動による交流があったヨルダンでも類似の状況が見られ、比較対象として意義深い[錦田2010]。

1948年戦争(第一次中東戦争)が始まると、ガザ地区のみならずヤフファーを中心としたパレスチナの沿岸都市からも多くの難民がエジプトにも押し寄せた。彼らの大半はアレキサンドリアやカイロに向かい、ホテルやアパート、親戚宅などに居場所を求めたという。著名な歴史家で教育者でもあるハリール・サカキーニーの娘であるハーラは、当時のヘリオポリスが「パレスチナの植民地(colony)となり、一軒おきにパレスチナ人の家族が住んでいるような状況になった」と日記に書き残している(p.14)。

エジプト政府はアッパースィーヤやカンタラ・シャルク、アザリタなどに難民受け入れの臨時キャンプを設置したが、これらは早い段階で閉鎖されることとなった(p.37)。経済的な保証人がいないパレスチナ人はガザ地区へ送り返され、1万1千~3千人ほどいたとされる難民は、1950年の時点で2~3千人程度にまで減少したとされる(pp.17-19)。その一方で、経済的目的の往来は促進された。1952年の自由将校団による革命後は、ガザ地区に自由貿易圏が設けられ、活発な往来がなされた(p.20)。またナーセル期にはアラブ民族主義の旗印の下、パレスチナ人に対して就労や教育の機会が開かれたため、ガザ地区などから来てエジプトの大学に入学する学生が増えた。就労制限も緩和され、商売の開業許可は取りやすくなった。公教育は小学校から大学生の一部に至るまで、エジプト人と同様に無償とされた。第二章で詳述されるように、ナーセル期は国内のパレスチナ人にとって「黄金期」だったといえよう(pp.40-45)。

パレスチナ人は庇護されるだけでなく、自ら抵抗勢力として活動もした。第一章で紹介され、後の各章でもたびたび言及されるのは、こうした部隊の存在である。ガザ地区でエジプト軍諜報部のパレスチナ部隊長官を務めたムスタファー・ハーフィズは、パレスチナ人を中核とするコマンドーを結成し、部隊はエジプト軍の第141大隊に編入され、「ムスタファー・ハーフィズ旅団」と呼ばれた(p.21)。またPLOの正規軍としてパレスチナ解放軍が組織され、1967年戦争(第三次中東戦争)ではエジプトの指揮下で戦った(pp.22-23)。イスラエル軍は戦争中、彼らを捜索・拘束し、他の約1万3千人の民間人とともにエジプトへ追放した(pp.25-28)。

第二章ではこうした流れを受け、エジプト政府の政策が国内のパレスチナ・コミュニティに与え

た影響について述べられている。革命前の王制期には、エジプト政府の「移民・旅券・国籍局」が発行する滞在許可証に、難民としての地位が明記された (p.36)。1948年にはハーッジ・アミン・フサイニーが中心となり「全パレスチナ政府」が設立されたが、戦争が終わってガザ地区がエジプトの管轄下に入ると、その拠点はカイロに移された。「全パレスチナ政府」は創設期の PLO と同様、エジプト政府の強い影響下に置かれることとなり、エジプトとガザ地区のパレスチナ人に、パスポート代わりの渡航許可証を発行する組織に矮小化されてしまった (pp.36-38)。

自由将校団の革命後も、パレスチナ人の滞在に関する厳しい制限はしばらく維持されたが、1955年に方針は一変することとなる。ガザ市の鉄道駅近くのピル・アル＝サファーに駐屯していたエジプト兵 39 名がイスラエル軍の攻撃で死亡する事件が起きたのである (p.21)。これ以降、エジプト政府はパレスチナ・ゲリラによる越境攻撃を支援し、エジプト国内で多くの権利を認める方向に変わった。

しかし「黄金時代」は長くは続かなかった。キャンプ・デーヴィッド合意に続き、1979年にサーダート政権はイスラエルと平和条約を交わし、「アラブの大義」の旗が下ろされる中で「恩知らず」のパレスチナ人への反発は強まっていった (pp.45-46)。決定的な打撃となったのは、1978年のエジプト文化大臣ユースフ・スイバーイーの暗殺である。主犯のアブー・ニダール一派は当時すでにファタハと PLO に追放されていたにもかかわらず、キプロス島での犯行の責任はパレスチナ人コミュニティ全体に帰せられることとなった (p.46)。

こうした第二章の記述は、「全パレスチナ政府」や 1955 年のイスラエル軍とエジプト軍の衝突、スイバーイーの暗殺など、エジプト在住のパレスチナ人の処遇に影響を与えたエジプト周辺地域の重要事件に光を当てるもので興味深い。それに対してフスニー・ムバーラク政権期以降に関する本章の解説は、いささか新味に欠けるものではある。1982年のイスラエル軍によるレバノン侵攻および第一次・第二次インティファダ（民衆蜂起）を受けてパレスチナ支持が盛り上がったことや、1991年の湾岸戦争でサッダーム・フサイン大統領によるリンケージを受け容れたことで、パレスチナへの支援が干上がったことは既によく知られている。逆に見れば、この時期以降は、エジプト周辺のローカルな地域情勢に限られない、こうした大きな文脈での動態が、エジプト国内においても大きく作用したと言えるのかもしれない。

第三章では、エジプト国内でのパレスチナ人の居住パターンと、それに関連した社会的ネットワークの構築について述べられている。UNRWA が支援を継続しているヨルダンやレバノンなどの周辺アラブ諸国とは異なり、エジプトではパレスチナ難民を收容するための臨時キャンプは早い時期に閉鎖された。キャンプの住民はガザ地区へ移送されたり、地方で集住村を形成したりしたほかは、都市部の各地にばらばらに散住している。だが難民キャンプの存在は、パレスチナ人にとって「ある意味でのアイデンティティの焦点」を提供するとエル＝アベドは述べる (p.64)。それは離散したコミュニティにとって「ホームベース」の役割を果たし、社会的ネットワークの紐帯を強める重要な要素なのだという。そうした場所を欠くエジプトのパレスチナ人は、どのような適応戦略をとっているのか。

聞き取り調査の結果をもとに、彼女が持ち出しているのは、社会資本という考え方である。親族、職場、近隣住民などとの間で構築されるネットワークは、ベン・ボラスにより「F コネクション」(families, friends, and firms) と呼ばれ [cited in Coleman 1990: 304]、相互の支えあいの紐帯となる (p.66)。具体的には、大学の進学費用や職探しなどの場面で活躍することが多いが、こうした事情は、評者自身が調査を行ったヨルダンやレバノンでも共通する傾向である。

本章が興味深いのは、こうしたネットワーク構築の手段としてパレスチナ人同士の婚姻について述べる際に、国籍取得の手段としてのエジプト人との結婚も並列に採り上げている点である。第二章の最後で既に言及されているように、エジプトでは2004年に国籍法が改正され、エジプト人女性は男性と同様に、子どもにエジプト国籍を与えられるようになった。その結果、パレスチナ人男性にとってエジプト女性と結婚する魅力は増し、相手の選択には世代の差が反映されるようになったとエル＝アベドは指摘する。その理由は、古い世代は故郷への郷愁が強いが、若い世代はエジプトで育ったこともあり、諸外国とのつながりが彼らの不安定な法的地位の中で有効に作用することを強く実感しているからだという (p.70)。これは国籍がほぼ全員に認められているヨルダンや、逆に取得要件がますます厳しくなっているレバノンでは見られない傾向である。

第四章では滞在許可の取得方法と種類、旅券の取得と、就業状態について述べられている。パレスチナ人への滞在許可の発行機関は、入国した時期により大きく二つに分けられる。1967年以前にエジプトに来た場合は「移民・旅券・国籍局」が、それ以降はガザからカイロに移転してきたAOGG (Administration Office of the Governor of Gaza) が各々許可を発行する (p.79)。有効期間は3年から5年で、申請には合法な就労の証明書か、エジプト人配偶者の存在、もしくは2万ヨルダン・ポンド以上の貯蓄証明が必要となる。だが就労規制のために不法就労が多いパレスチナ人にとって、これらはいずれも困難な条件であり、副業によって就労証明を得たり、不法滞在で罰金のみを支払い続けるなどして国外退去を逃れる例も多いという (pp.82-84)。

彼らにとってのパスポートにあたる一時旅券には、エジプト在住のパレスチナ人用と、ガザ地区出身のパレスチナ人に発行されるものがあり、有効期間は一律5年である。後者は特に湾岸諸国などへ出稼ぎに出たパレスチナ人が取得しており、在外公館 (エジプト大使館) で更新できる。ただしそれは、保持者にエジプトでの在住を認めたものではない。そのため1991年の湾岸戦争や、1995年にカダフィーによる無人地帯への強制移動の際、ガザ地区から来たパレスチナ人は、クウェートやリビアから国外追放を受けながらも行き先が決まらず、国境で立ち往生することになった (pp.84-86)。

雇用および経済状態について、評者には意外であったが、パレスチナ人はエジプト社会では裕福であるとのイメージが強いという。だが実際には、4分の3以上のパレスチナ人は厳しい経済状態に置かれていることが、ハナフィーの研究やアフラム紙の記事で明らかにされている (pp.90-91)。特にサーダート政権以降、就労規制は強化された。彼らの多くは、政情の影響を受けにくい運送業や、農業での季節労働に就いているという。

第五章ではエジプト国内でパレスチナ人が得ている教育、保健、および財産権について述べられている。教育に関して、彼らは1948年戦争後しばらくの間、エジプト人と同様に無料で公教育を受けることができたが、サーダート政権で大臣決定により制限が設けられた。特徴的なのは、PLOおよびAOGGの職員の子どもに対しては、無料の教育の機会が与えられ続けたことである。これは1979年のエジプト・イスラエル平和条約締結以後も変化がないという (p.106)。だがそれ以外の学生にとって、特に大学の授業料は重くのしかかり、正規登録できないため学位の取得が困難な状態が続いている。

医療・保健は、パレスチナ人への社会保障の中で最も条件の恵まれた分野だという。赤新月社が運営するパレスチナ病院や、モスクに付属する診療所など様々な医療機関が存在するうえ、公立病院でも診察は非常に低額で受けることができるからだ。問題となるのはむしろ病院までの距離や、慢性疾患の薬不足だという。

財産権については、1963年のナーセル期の法がパレスチナ人を他の外国人と区別し、特別に土地所有を認めてきた。しかし1985年に入り、土地法第104条が設けられてからは、その権利は失われた。大規模な事業のための不動産所有は、エジプト人と共同事業にすることでその後また認められている。その他の貯蓄や資金運用のあり方として、評者の目を引いたのは、親族や近隣住民の間で形成される頼母子講の存在と、花嫁の嫁入り道具として持参される金の装飾品の有効性である。こちらはエジプトのみならず、ヨルダンやパレスチナ自治区でも定着した慣習といえる。

第六章はエジプト政府とPLOの関係を扱うが、内容的にはPLO傘下の諸組織の形成・機能の説明が大半を占める。こちらは前述のブランドが専門に扱ってきた内容であり、本書でも彼女の論考への言及が多い。労働組合、女性団体、赤新月社などの活動の詳細については本文に譲るとして、全体の流れを見るとエジプトは1970年代まで一貫して外交的にはPLOを支持する姿勢をとり続けてきたという。転機となるのはキャンプ・デーヴィッドよりも少し早い1975年で、シナイ半島からの撤退合意によって既にアラブ・イスラエル紛争から手を引く態度を明らかに始めていた(p.129)。エジプト国内におけるPLOの役割自体もそれによって縮小し、かつての勢いを取り戻すことはなかった。PLOの幹部はエジプト育ちではなく大半が外部から来ており、特に1967年戦争後に移動してきたパターンが多いという(pp.140-141)。

また本章の最後では、1994年のパレスチナ自治政府創設を受けて、エジプトからガザ地区や西岸地区などへ移動した事例が挙げられており、興味深い。エジプトのパレスチナ大使館は、自治政府で働くためガザ地区への移動を希望する者に申請書を提出させた。移動を認められた者には、パレスチナIDと自治政府の一時旅券が発行された。その人数はおよそ4万5千人に上ったとも指摘され、カイロ郊外のダールッサラムなどではエル＝アベドの調査中、パレスチナ人が出て行った後の空き家が目立ったという(pp.143-144)。だが待望の帰還は想像以上に困難なものであった。占領下の経済破綻や、異なる生活習慣などに適応できず、再びエジプトへの帰国を望む者も少なくなかった。とはいえ一度パレスチナ旅券を受け取った者への代償は大きく、彼らは既にエジプトにとって外国人とみなされていた。そのため「帰国」はしてもエジプトでの学費は外国人料金となり、滞在許可は毎年更新せねばならなくなった(pp.146-149)。

第七章ではエジプト在住のパレスチナ人に関連する国際的な取り組みと法規について取り上げられている。1948年戦争の開戦を受けて、フォルケ・ベルナドッテ伯爵らがパレスチナ難民の権利保護の重要性を指摘したこと、しかしUNCCPなどは最終的に帰還ではなく再定住を推し進める方向で動いたこと、イスラエルは象徴的・限定的な帰還の提案をしたが受け入れられなかったことなどが前半で述べられている(pp.155-160)。後半では法規や決議の役割について整理されている。難民・無国籍者の権利を保護する機関としては、UNRWAの他にUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)が存在するが、その活動の根拠法となる1951年の難民条約をエジプトは大きな留保をつけて批准している。そのためエジプト政府は、国内のUNHCR登録難民に対しても保護を行なう義務を負わず、UNHCRの支援は実質的に機能しないようになっている(p.164)。アラブ連盟は、1965年の有名なカサブランカ協定をはじめ、パレスチナ人の権利保護を受け入れアラブ諸国に呼びかける多くの決定を出している。だが実際にはそれらは機能しておらず、湾岸戦争後に出された決議第5093号は、その実行に公式に留保を認める内容だったと指摘されている(pp.167-169)。

最終章は、エジプト在住のパレスチナ人のアイデンティティと将来の見通しについて述べた章である。そこではまず、彼らのホスト国への同化を促す要因として、エジプトとパレスチナの文化的な近さ、政治的不安定、世代交代が挙げられている。またエジプトの公教育では、特にナーセル期

以降はパレスチナやアラブに関する内容が少なくなっており、親が意識的に子どもに教えない限り、パレスチナの歴史に関する情報や、パレスチナ人としての意識は育ちにくいという。これはUNRWA経営の学校が存在しないエジプトに特徴的な点といえるだろう。そうしたなかでエジプト人との婚姻は、パレスチナ人の同化を促す強力な要因として、今後も作用するとエル＝アベドは予測する。本書で何度も採り上げられている2004年のエジプト国籍法の改訂が、エジプト人女性の子孫にも国籍の取得を認めたことが、この傾向をさらに加速させるという。その結果、「エジプトの『パレスチナ問題』はおそらく『自然と解決』するだろう」(p.184)とさえ彼女は述べる。だがこうした解決は正しいのか。否、「こうした状況はパレスチナ人にとって苦痛に満ちたものである」(p.184)とエル＝アベドは強調する。帰還を求めるパレスチナ人は、たしかに市民権は欲しくないかもしれない。だが彼らには権利が認められる必要があり、基本的な権利の附与は、かえってパレスチナ・アイデンティティを維持する余裕を与える。将来的な負担を減らし、アラブ社会での体面を保つ上でも、これはエジプト政府にとって望ましいではないか、とまとめて、彼女は筆を置くのである。

以上、各章の内容に就いてやや丁寧にまとめたが、これはエジプト在住のパレスチナ人の歴史と現在について、共有されている情報があまりに少ないと考えたためである。乏しい資料と聞き取り調査による一次資料をもとにまとめられた著作として、本書は高く評価できる。また本書は、評者自身が調査を行なっているレバノンやヨルダンといった他のパレスチナ難民受け入れ国における事例との比較が可能な、具体的材料を豊富に提示するものでもある。就労状況や財産貯蓄の方法などは、パレスチナ以外の地域での移民・難民研究にとっても参照点となるだろう。地域史的には、ガザ地区とエジプトのパレスチナ人の中で構築・維持されてきた密接な関係が、国境線で区切られた国家を超える地域的な枠組みを示唆している。この他にも、国際法上の難民の地位や、国内的立場の具体的な事例と政策状況を合わせた分析など、さまざまな視点が採り入れられており興味深い。

だが敢えて苦言を呈するならば、本書の構成は、これら全ての要素を含みこむ形がとられているため、全体としてやや総花的な感が否めない。これは当初予定されていた聞き取り調査の中断が影響した結果と思われる。章構成としては、各々のトピックごとに歴史を振り返る構成となっているため、内容的にやや反復が多い。聞き取り調査以外で引用されている二次文献は著名なものばかりで、資料面での新しさはあまりない。

また実務に基づく視点が基礎となっているためか、各章の記述はやや詳細に過ぎる感もある。評者自身は、パレスチナ人の移動規制の法的側面や個別の事例に強い関心をもっているため、本書の記述は非常に興味深く読めたが、そうでない読者にとってはやや退屈であるかもしれない。逆に最終章の「1948年と1967年」の移動年の違いによるパレスチナ・コミュニティの分裂などについては、印象的な指摘であるだけに、事例を引用しながら丁寧に記述して欲しかった、といった不満もある。

エル＝アベドが何度も取り上げている、2004年の国籍法改訂の話は、国籍に関する比較法研究の立場からも興味深いものであろう。ただこちらは評者の自身の研究に対する自戒も含めてだが、エジプトの法体系が簡略にでも説明されていないために、国内法上でどのような位置づけがされているのか理解しにくい。

いずれにせよ、これまでとりあげられることの少なかった題材をテーマに、一冊の研究書がまとめられたことの意義は大きい。パレスチナ難民の問題は対イスラエル関係のみならず、アラブ諸国にとっても対処の難しい懸案である。そうした政治的にセンシティブな性格の課題に取り組むことの困難と意義については、評者も共感するものである。実際、エル＝アベドがこれまで著してきた

論文の内容と、評者自身の問題関心には驚くほど共通する項目が多い。ヨルダン在住のガザ難民や、イラク難民もそのひとつである。故郷を追われてホスト国の客人となった難民というマイノリティのなかで、法的に更にマイナーな立場の人々へ関心を寄せていくという視座がそこには存在する。移民・難民は常に、将来的な帰還と、現在の権利保護という二元性の上に立たされている。それらをゼロサム的に捉えるのではなく、また彼らを援助の単なる客体とみなすのではなく、より柔軟な解釈と実践により必要性を満たしていくことが望まれるだろう。

参考文献

- 錦田愛子 2010 『ディアスポラのパレスチナ人——故郷^{ワタン}とナショナル・アイデンティティ』 有信堂。
- Arzt, Donna. 1997. *Refugees into Citizens: Palestinians and the End of the Arab-Israeli Conflict*. New York: A Council on Foreign Relations Book.
- Brand, Laurie. 1988. *Palestinians in the Arab World: Institution Building and the Search for a State*. New York: Columbia University Press.
- Coleman, James S. 1990. *Foundations of Social Theory*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hanafi, Sari, and Olivier Saint-Martin. 1996. "Border Stories: Palestinians in Northern Sinai," in Sari Hanafi, Olivier Saint-Martin and Abdel Qader Yassin (eds.), *The Palestinians in Egypt and Northern Sinai*, Ramallah: Palestinian Diaspora and Refugee Center-Shaml, pp.1-18.
- Schulz, Helena Lindholm. 2003. *The Palestinian Diaspora: Formation of Identities and Politics of Homeland*, London: Routledge.

(錦田 愛子 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

Kenneth M. George. 2010. *Picturing Islam: Arts and Ethics in a Muslim Lifeworld*. hichester: Wiley-Blackwell, 164 pp.

本書はインドネシアの画家、アブドゥル・ジャリル・ピロウス (Abdul Djalil Pirous, 1933-) の語り (narrative) と作品に注目し、国内外の美術界、美術市場、インドネシア社会、ムスリムコミュニティといったさまざまな文化のせめぎあいの中で、彼の「生活世界」が形成されていく過程を描いたものである。

著者ケネス・ジョージ (ウイスコンシン大学マディソン校人類学教授) は、インドネシアのムスリムコミュニティに対する研究を行ってきた人物である。彼の1作目の著書は、スラウェシ島南部における首狩りの儀式的文化ポリティックスに関するものであった [George 1996]。

本書は著者の2作目の著書であり、1994年から2002年までの調査をもとに編まれたものである。本書は当初、ピロウスとの交流を通じインドネシアの近現代美術に関心を持った著者が、美術作品と宗教の関係を明らかにすることを目指して構想された。著者はまた、本書を授業の素材として用いようと考え、「生活世界」を民族誌的に詳細に考察し、大きな絵 (big picture) を見つけだすこと、人類学、美術史学、美術と宗教をめぐる文化ポリティックスに関心を持つ研究者が議論の糸口を見つけること [George 2010: 9] を執筆の目的とするようになった。したがって本書は、インドネシアのムスリムの生活、インドネシアの近現代美術に関心を持つ者だけでなく、人類学と美術史学全般に関心を持つ者にとって有益な書であるといえる。

1. 研究史の概要

本稿ではまず、イスラーム圏の近現代美術研究の課題を示し、つづいて本書の特徴を述べる。イスラーム圏の近現代美術は、19世紀半ば以降、各地において西洋美術の技法を採り入れることによって発展してきたものである。そして1950年代頃には、西洋美術の技法を用いつつ、地域の文化モチーフを採り入れた作品が生まれはじめた [Ali 1997]。その中でも注目を集めているのが、1960年代から1980年代に最盛期を迎えたアラビア文字を採り入れた作品であり、本書において画家ピロウスが制作している作品でもある。これらの作品は、美術史研究の分野ではカリグラフィー派 (al-Madrasa al-Khatīya fī al-Fann) と呼ばれ、起源や定義が論じられ、作品の分類が行われてきた。さらに1990年以降は、作品を制作する画家の動機を明らかにしようとする研究が盛んに行われてきた。しかし、カリグラフィー派の作品は、イスラーム圏の各地で同時発生的に制作が行われ始めたものであり、特定の主張に根差した運動ではないため、研究対象としては扱づらいものである。作品の分類を行ったアリは、これらの作品を包括的に、「イスラーム美術」(Islamic Art) の伝統を受け継ぐものではないかと推測した [Ali 1997: 185-187]。アリによれば「イスラーム美術」は、クルアーンを最高の美術作品と考え、その表現を目指すものである。そしてカリグラフィー派は、アラビア文字を通してクルアーンの表現に近づこうとするものである。アリは、ムスリムのカリグラフィー派と同様の作品を制作する非ムスリムの画家との違いは、画家の意図と無意識の中に組み込まれたイスラームの伝統にあると述べる [Ali 1997: 187]。また、イラクを中心にアラブ諸国のカリグラフィー派研究を行うシャブートは、アラブ諸国のカリグラフィー派の作品は、画家のアラブ・アイデンティティの表現ではないかと推測する [Shabout 2007: xv]。しかし、これらの研究から明らかとなっているように、美術史学の手法のみを用いて、画家のアイデンティティと作品の関係に迫ることは、非常に難しい課題であった。カリグラフィー派をはじめとした近現代美術の作品を問題にする際には、画家の宗教的、地域的アイデンティティと作品の関係を考察できるような新しい手法の提案が不可欠である、と考えられはじめたのである。

また同時に、一度西洋美術の技法を受容している作品を、「イスラーム美術」という枠組の中で論じることに疑義が提出されはじめた。もともとは西洋美術史学の用語である「イスラーム美術」という語の定義を再考することが、イスラーム圏の近現代美術研究の2つめの課題であると考えられ始めたのである。

2. 美術史学、人類学の課題と本書の分析枠組

2.1 美術史学と人類学の課題

本書の特徴的な点は、著者が提示した新しい分析枠組にある。まず、新たな分析枠組の発想の契機となった、1980年代以降の美術史学と人類学の変遷を振り返る。2つの学はその成立以来、美術史学が「美術」を対象とするのに対し、人類学が未開の「美術らしきもの」を対象とすることにより、分業体制をとってきた。しかし、1980年代以降の社会の変化に伴い、本質主義や文化相対主義の立場から、従来の分業体制に疑問が唱えられはじめた。1990年代に入ると、構築主義の立場から、「文化」「美術」という概念に対して批判が行われるようになった。その批判は、「人類学者がフィールド調査を行うような非西洋の「美術らしきもの」はすべて「文化」で、西洋の美術作品のみが「美術」なのだろうか。「美術」という概念自体、システムとして構築されたものではないだろうか」というものであった。そして、これまで非西洋の「美術らしきもの」を対象としていた人類学の分野では、西洋の美術界 (art world) をとりまく文化ポリティックスを扱う、マーカスとマイヤーズの研

究 [Marcus and Myers 1995] が登場した。一方、西洋の「美術」のみを対象としていた美術史学の分野でも、新しい試みが見られ始めた。まず、これまでの美術史学を批判し、美術作品を新しい視点から捉えなおそうとする、バクサンドール [Baxandall 1985] やアルパースによるニュー・アート・ヒストリーの研究、つづいて、非西洋の作品を対象に民族誌を書こうとするテイラーによる研究 [Taylor 2004] が登場した。このように、1990年代以降の美術史学と人類学の歴史は、互いの手法をとりいれつつ、新しい分析枠組を模索する過程でもあった。しかし、これらの新しい研究は、作品や画家の背後にある権力関係を対象としたものが多く、画家の制作意図や内的感情を問題にしたものは稀少であった。

2.2 本書の分析枠組

著者もまた、人類学と美術史学の両方の手法を用いしつつ、新しい分析枠組を提示しようと試みる者のひとりである。本書の狙いのひとつは、美術作品と宗教の関係を論じることである。著者は個人の宗教の問題、主観性の問題を、倫理 (ethics) の問題であると考え、倫理について論じるためには、個人の「生活世界」、つまり外側の世界との接触により形成されていく日常の生活の場であり、観照、内省の働く場 [George 2010: 5] の形成の領域にまでおりにかなければならない。著者はこのために、自身によって「民族誌的美術史」(ethnographic art history) [George 2010: 144] と名付けられた分析枠組を提唱する。「民族誌的美術史」とは、画家の語りと作品を通じて書かれた民族誌を、「現在形で美術史と向き合う」[Belting 2003: 192] ために用いる試みである。著者によれば、画家の語りとその作品は、諸力のせめぎあいの中であらわれる間主観性 (subjective-in-between) の領域であり、生活世界の形成過程を考察するのに最もふさわしいものである。著者はこの分析枠組を通じ、人類学の分野が対象としてきた2つの極、個々人の体験 (ミクロの視点) と権力の学 (マクロの視点) の間に身をおき、2つの間にあるものを明らかにしようと試みる。また同時に、美術史学の分野においてこれまで語ることが困難であるとされてきた、画家のアイデンティティと作品の関係を描き出そうと試みるのである。

3 本書の構成と内容

3.1. 構成と第5章までの内容

本書の構成は以下の通りである。

序

導入部 イスラームを描くこと

第1章 ムスリム市民、ムスリム画家になること

第2章 啓示と衝動

第3章 2枚つづりの絵——美術をイスラーム的にすること、イスラーム美術をインドネシア的にすること

第4章 社会の中での精神のノート (spiritual notes)

第5章 苦悩、裏切り、不安、そして信仰

結論 回想

後書き 枠組を選ぶこと

また、これらの本文に加え、ピロウスの25点の作品のカラー図版が付されており、読者の理解を助けるものとなっている。

ここで、本書の内容を振り返ることとする。まず、序章である。本書は、「私の作品は宣教活動

の一環ではない。私は宗教キャンペーンを行っているのではない。私は美術作品を制作しているだけだ。おわかりのように、これらの絵画はすべて、私の精神のノートである」[George 2010: 1] というピロウスの言葉で幕を開ける。この言葉は、ピロウスがしばしば「イスラーム的な美術」を制作する動機を尋ねられるのに辟易して発した言葉である。著者はこれまで批評家や知識人が、「イスラームとは何か」「イスラーム的な美術とは何か」といった問いのみに関心を持ち、個人の生きる「生活世界」に関心を向けずにきたことを指摘する。そして、本書ではこのような過ちを避けるために、1人の画家に焦点をあて、共に生活し、日常の営みを考察すると述べる。

第1章から第5章までは、ピロウスの人生がテーマごとに述べられた章であり、それぞれのテーマに対するピロウスの語りと著者の解釈が述べられ、テーマに沿った作品が提示される。まず、第1章である。第1章では、ピロウスの出生から、ピロウスが画家として出発するまでの様子が述べられる。ピロウスは1933年、インドネシアのアチュエに生まれた。彼は16歳の時にインドネシア学生軍に加わり、独学で美術技法を習得し、ナショナリズムのプロパガンダを行うためのポスターなどを制作していた。そして1952年、インドネシアを代表する画家スジョヨノ (S. Sudjojono, 1914–1986) らが出品している展覧会を訪れる。ピロウスはその展覧会に刺激を受け、本格的に美術を学ぶためバンドゥンの美術学校に入学した。バンドゥンの美術学校は、インドネシアの美術学校の中でも、特に西洋美術の技法の受容を促進するものとして知られていた。美術学校において当時アメリカで盛んであった抽象表現主義の技法を学んだピロウスは、国内でその名を高め、ニューヨークで美術の勉強をするための助成を得ることとなった。

続く第2章では、1969年にアメリカに渡ったピロウスがひとつの疑問に突き当たり、それを解決するために葛藤する様子が描かれる。それは、「自分は何者か」という疑問である。この時期のことを、ピロウスは次のように振り返っている。「アメリカに渡った当初、私は自分に対しこのような感覚を持っていた。これで自分も国際的な作家となったのだという感覚である。(中略) 私は近代美術の画家になろうとした。そして抽象表現主義を好み、クレーの絵画を好んだ。(中略) しかし、ニューヨークに行き5番街を歩いていたとき、突然声が聞こえた。『ピロウス、おまえは誰だ。確かにおまえは近代美術の画家となった。しかし、おまえはインドネシアの近代美術の画家となれたのか?』 [George 2010: 43]。ピロウスはその問いを反芻した。「コスモポリタンになろうとするためには、まずインドネシアの画家にならなければならない。インドネシア人であることを示さなければならない」。

しかし、どのようにすればインドネシアの画家になれるのだろうか。そのような問いを抱きながらメトロポリタン博物館を訪れたピロウスは、そこに展示されていたイスラームの細密画やアラビア書道の作品に心を奪われる。ピロウスは、「これが最も近いものだ」 [George 2010: 43] という衝撃を受け、帰国後すぐにクルアーンの句を用いた版画の制作に取りかかった。アラビア語を母語としないピロウスにとって、綴りを間違わずに文字を掘ることは困難なことであり、専門家の指導を受けながら、一語一句丁寧に制作を行う必要があった。そして1970年、ピロウスにとって初めてのアラビア文字を用いた作品、クルアーンのイフラス章の句を掘った作品が完成した。

ピロウスはこの時期の作品を「抽象的」(abstract) なものであると述べる [George 2010: 49]。ピロウスにとってこのような作品は、自分の感情を抽象的なものを通じて表現するという意味では、美術学校で習得した抽象表現主義の作品と同じ位置付けにあった。ピロウスの作品は、美術にクルアーンの句を持ち込むことや、僅かな綴りの間違いなどを指摘するウラマーの反対を受けながらも、徐々に政府関係者や大使によって受け容れられ、贈り物として購入されることも増えていった。

続く第3章では、ピロウスの作品がイスラーム的なもの、インドネシア的なものとなっていく過程が述べられる。著者はまず、作品がイスラーム的なものになっていく過程を考察する。ピロウスの作風の新たな展開点は1975年前後である。クルアーンの句を用いた作品の展覧会を通じて、観客にしばしば「この作品は何を表現しているのか？」と尋ねられたピロウスは、「クルアーンの句を通じた自分の感情の発露」である当時の作品が、人々に何を伝えられるのかと悩みはじめる。これまで彼の作品制作の目的は、クルアーンの句を用いた作品を目にした人々がイスラームの教えに触れ、喜びを感じることであった [George 2010: 60]。彼はクルアーンの句によって人々が喜びを感じる理由について、「アッラーとの間の垂直の関係、人々との間の水平の関係、人と住まう環境の間の斜方向の関係をあらわすものであるからである。それは、人間への愛、自然への配慮を導くものである」と考えていた。そして、どうすればそのような喜びを感じてもらい、「人の役に立つ良い人間」[George 2010: 61]になれるのだろうかと考えたピロウスは、自分の感情を抑え (sacrificing myself)、クルアーンの哲学的な概念を、人々を歓ばせる形で表現することを試みはじめた。ピロウスはこの試みを、「美的な喜びと倫理的な喜びがひとつになったものである」 [George 2010: 61] と表現している。

続いて、作品がインドネシア的なものとなっていく過程である。ピロウスはインドネシア国内を巡回する自身の作品の展覧会を通して、国内で失われつつある文化に目を向け、自国の文化が減びゆくことを警告しようと考えようになった。そして、インドネシアやアチェ独特の色使いやモチーフを取り入れることにより、作品はインドネシア的なものとなったのである。

なお、ピロウスはイスラーム美術について次のように述べている。「イスラーム美術は国際的なものである。同時に、多種多様なものである」 [George 2010: 74]。ピロウスによれば、西洋美術の技法にクルアーンの句を取り込むことで、彼の作品は国際的な、普遍的な価値を獲得した。しかし、多種多様なあらわれをみせることがイスラーム美術の特徴でもある。したがって、インドネシアの文化的モチーフを取り入れることにより、作品ははじめてインドネシア的なイスラーム美術として完成をむかえるのである。

本書は以上のように、ピロウスが画家として成長していく様子をあますところなく確認してから、最終章へと向かっていく。第4章においては、美術市場に自分の作品、「精神のノート」が出回ることを危惧するピロウスの姿が述べられる。オークションや展覧会においては、通常ピロウスの作品は「インドネシアの近代美術」としてカテゴライズされる。しかしこのような作品は、実際はインドネシアのムスリムに「役に立つ」ように制作されたピロウスの倫理的なメッセージであり、ピロウスはそれを売ること次第に消極的になっていく。

続く第5章においては、東ティモール独立運動や自由アチェ運動などの戦争の中で、多数の死者が出ることに心を痛めるピロウスの様子が述べられる。ピロウスは1990年代に入り、戦争の恐ろしさを記録することが新たな戦争への抵抗を生みだすと考え、戦争をテーマにした作品を制作しはじめる。しかし、彼はこれらの作品の中にクルアーンの句を用いることはなかった。ピロウスにとって、クルアーンの句を用いた作品は政治的なメッセージには適するものではなかった。なぜなら、クルアーンの句をアチェの正義のために用いることは、クルアーンの政治化につながり、誤解を生む可能性があるからである。しかし、このような悲痛な経験を通じ、ピロウスはイスラームの信仰の力をより確信するようになった。その信仰がピロウスの新しい作品に結実していったのである。著者はこの時期のピロウスの制作の目的を、「作品を通じて善を行い、人々に神という避難所があることを思い出させることである」 [George 2010: 130] と述べている。以上が著者の8年間に渡る

調査の報告である。

3.2 結論部の内容

結論部は著者の所感が述べられる章であるが、本書の要となる章でもある。著者は本章において、標題である「イスラームを描くこと」(Picturing Islam)の種明かしを行う。イスラームを描いているのは画家ピロウスだけではない。本書は、ムスリムでない著者がイスラームを描こうとする奮闘の記録でもあった。

本章の冒頭において著者は、ある研究者から次のように非難されたことに触れる。「君がピロウスの作品を研究していることは分かった。しかし、私が知りたい事はただ一つだ。君はピロウスの作品のクランの句をみて、身震いする(tremble)のか。畏敬(awe)を感じるのか」。

そして著者は、自分がムスリムでないこと、調査の最後までムスリムのようにピロウスの作品を理解できなかったであろうことを述べる。著者は本書において、異文化を表象することの可能性とその限界に向き合おうとしたのである。

第1節から第2節は、本書の分析枠組がどのように実行されたかが述べられる節である。第1節「生活世界と長期にわたる民族誌的フィールドワーク」は、本書の分析枠組の1つの柱である語りについて述べられる節である。本節では、ナラティブアプローチの可能性とその限界が吟味される。著者は、本書の語りの大部分を1994年と1995年のインタビュー調査によって取得していたにもかかわらず、2002年まで調査を継続した。調査のテープ起こしをしてきていた協力者が、ピロウスが心を開いてくれたのではと告げたのは、2001年のことである。著者は本節において、この調査を通じて感じた長期にわたる調査の必要性を指摘する。また、調査が政治的状況に左右されることをも指摘する。

第2節「生活世界と絵画のフィールドワーク」は、本書の分析枠組のもうひとつの柱である作品について述べられる節である。著者は作品について考察する際に、次の2点を心掛けた。1点目は、人類学者オートナーが調査の際に意図をもつ主体を重視した[Ortner 2006]ように、美術作品を考察する際にも、作品の後ろに潜む主体の「意図のパターン」(patterns of intension)[Baxandall 1985]を見出そうとしたこと、2点目は、人生の転換点の指標となる作品の転換点を、使用される道具の変化などから見出そうとしたことである。そして著者は、作品とピロウスの「生活世界」の関係を考察するために、商品として流通している作品ではなく、ピロウスが家にしまっている作品を中心に考察したことを述べる。

続く第3節から第4節は、本書の分析の結果が述べられる節である。第3節「イスラームを描くこと——生きた宗教として——」では、ピロウスの語りの分析や、作品に宗教性、地域性が付与されていく過程を明らかにすることで、「イスラーム」は必ず地域ごとの個性をもつ宗教として存在するものであるという結論が述べられる。第4節「ピロウスを描くこと——インドネシアにおけるイスラームとポストコロニアルの画家 市民として——」では、ピロウスとインドネシア国家、グローバル化社会の関係が吟味される。ピロウスは、かつてナショナリズムのプロパガンダのポスターを制作していたように、愛国心の強い人物である。しかし、第4章で考察されたように、「インドネシアの画家」として作品が市場に出ること、インドネシアの人々のために作品を制作することは別のことである。現在のインドネシアの美術界は、グローバル化による美術市場の拡大、ビエンナーレ化(biennialization)現象の中で、メディア・アート、インスタレーションといった新たな作品が次々に登場し、ピロウスの作品は古い型の作品になりつつある。しかし著者は、インドネシア

のムスリムにとって、彼ら固有の「イスラーム」を描くピロウスの作品の重要性が廃れることはないと結論づけるのである。

4. 本書の意義と展望

以上本書の内容を概観してきたが、ここで評者の所感を述べる。本書が書かれたひとつの目的、美術作品と宗教の関係を明らかにすることは、イスラーム圏の近現代美術研究の課題に真正面から取り組むものでもあった。第1の課題、画家の宗教的、地域的アイデンティティと作品の関係を明らかにすることについては、著者は新しい分析枠組を提案し、これまで靜態的に考えられてきた画家と作品の関係を、より動的なものとして捉えなおすことに成功している。そして第2の課題、「イスラーム美術」という語の再考についても、一枚岩の「イスラーム美術」は存在せず、地域ごとの「イスラーム美術」が存在するという定義を示した。本書はこの2点において、イスラーム圏の近現代美術研究に大きな成果を附与し、新しい議論の可能性を開いたといえるだろう。

つづいて、本書が書かれたふたつめの目的、「ひとつの「生活世界」を民族誌的に詳細に考察し、大きな絵 (big picture) を見つけだすこと、人類学、美術史学、美術と宗教をめぐる文化ポリティックスに関心を持つ研究者が議論の糸口を見つけること」の成果を吟味する。この点においては、読者の関心にしたがってそれぞれの論点を見出すことが求められていることから、現代美術研究の観点から、評者が感じた2点の大きな成果を指摘しておきたい。1点目は、人類学において近年盛んに議論されている異文化表象の問題に取り組んだ点である。イスラーム圏の現代美術研究は、2000年以降ムスリムの研究者による研究が増加し、かつてイスラーム圏の作品が西洋の美術史学において「表象」されるだけであったという問題は改善されつつある。しかし裏をかえせば、非ムスリムの側から画家のアイデンティティと作品の関係を理解しようとする研究は稀少になりつつある。評者は、イスラーム圏の現代美術研究の次の課題を先取りするものとして、本書がこの問題に取り組んだ点を高く評価したい。

2点目は、美術界、美術市場と画家の関係を吟味した点である。著者は、画家の主観性に焦点をあてる本書の分析枠組を採用したことにより、美術界、美術市場の分析が手薄になったと述べている [George 2010: 144]。しかし、評者はこのことにより、これまで文化ポリティックスの研究、もしくは画家の人生と作品の研究に2極化していた現代美術研究の空隙を埋める研究がなされているように感じた。ピロウスはインドネシアの近現代美術の画家として、美術市場で最も高値をつける画家のひとりである。そのような画家が美術市場に対してどういうジレンマを抱えているのかという点は、関心をもたれつつもほとんど研究されてこなかった分野である。評者はグローバル化時代の現代美術研究の観点から、この点を高く評価したい。

なおここで、評者が感じた点を2点指摘しておきたい。それは本書の分析枠組に関わるものである。1点目は、分析枠組の2つの柱、語りと作品において、語りのほうに大きく重点が置かれていることである。2点目は、本書の記述において、しばしばピロウスの語りと著者の所感がまじりあっていることである。

まず1点目である。著者の関心が作品より語りにあることは、本書の書評を著したルケンス・ブルがすでに指摘している [Lukens-Bull 2010] ように、本文中のモノクロの図版と、綴じ込まれたカラー図版の通し番号が一致しないことなどにもあらわれている。本書において作品の考察は、あくまで語りの文脈の中で行われる。本書は、ピロウスが生活世界を形成していく過程を明らかにすることを狙いとしており、作品よりもその制作者に関心が向けられていることが分かる。つまり本

書は、著者が結論部第2節で掲げたような美術史的な関心よりも、人類学的な関心を明らかにすることに重心が傾いているのである。したがって、著者が採用する「民族誌的美術史」のめざす成果、「現在形で美術史と向き合う」ためには、本書の議論に加え、作品に対するより詳細な考察が必要であるといえるだろう。

次に2点目である。本書の記述においては、「イスラーム」が作品となる過程を話すピロウスの語り途中でさえぎられ、著者がピロウスの「イスラームを描こう」とする内的奮闘の記述へともつれこむ箇所が多数見受けられる。本書の読者は、ピロウスの「生活世界」の形成過程よりも、著者がピロウスの語りとの内的対話をする様子に注意をひかれてしまうのである。著者が結論部第3節で掲げたように、本書がピロウスの「イスラーム」の形成過程を描こうとするならば、本文中においてピロウスの語りとの著者の所感を混然一体のものとして記述するのではなく、ピロウスという人間をより客観的に記述することが望まれたであろう。

以上が当初評者が感じた点である。しかし本書を読了した評者は、これまで当たり前のようか考えていた、ピロウスの「生活世界」を客観的に描くことが果たして可能なのか、と自問せざるをえなかった。本書の調査において何度も内的奮闘を繰り返した著者には、そのような疑問はすでに織り込み済みであったように思われてならない。

本書の有益な点のひとつは、イスラーム圏の近現代美術研究に大きな成果を附与したことである。しかし本書の真の醍醐味は、諸学が個々の手法に限界を感じ、相乗り状態で新たな枠組が提案され続ける現代において、その枠組の可能性と限界について深く考えさせてくれることにあるのだろう。

参考文献

- 喜多崎親、益田朋幸 2005 『岩波西洋美術用語辞典』 岩波書店。
- 枡屋友子 2008 「美術史」小杉泰・東長靖他(編)『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会, pp207-212.
- 渡辺文 2008 「芸術人類学のために」『人文學報』京都大學人文科學研究所。
- Ali, Wijdan. 1997. *Modern Islamic Art: Development and Continuity*. Gainesville: University of Florida Press.
- Baxandall, Michael. 1985. *Patterns of Intention: on the Historical Explanation of Pictures*. New Haven: University of Yale Press.
- Belting, Hans. 2003. *Art History after Modernism*. Chicago: Chicago University Press.
- Butler, Judith. 2005. *Giving an Account of Oneself*. New York: Fordham University Press.
- Foucault, Michel. 1997. *Ethics Subjectivity and Truth*. Paul Rabinow (ed.), Robert Hurley et al. (trans.). New York: The New Press.
- Kenneth M. George. 1996. *Showing Signs of Violence: The Cultural Politics of a Twentieth-Century Headhunting Ritual*. Berkeley: University of California Press.
- Lukens-Bull, Ronald. 2010. "Kenneth M. George, *Picturing Islam: arts and ethics in a Muslim lifeworld*. Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2010, xviii, 164 pp.," *Contemporary Islam* 4.
- Marcus, George E. and Fred R Myers (eds.). 1995. *The Traffic in Culture: Refiguring Art and Anthropology*. California: University of California Press.
- Ortner, Sherry. 2006. *Anthropology and Social Theory: Culture, Power, and the Acting Subject*. Durham: Duke University Press.

Ricœur, Paul. 1992. *Oneself as Another*. Chicago: The University of Chicago Press.

Shabout, Nada. 2007. *Modern Arab Art: Formation of Arab Aesthetics*. Gainesville: University of Florida Press.

Taylor, Nora A. 2004. *Painters in Hanoi: An Ethnography of Vietnamese Art*. Honolulu: University of Hawaii Press.

(園中 曜子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Ahmed Bouyerdene, *Abd el-Kader: l'harmonie des contraires* (préfacé par Éric Geoffroy), Paris: Éditions du Seuil, 2008, 227 p.

本書の紹介

本書が対象とする、アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, 1807/8-83) は、19世紀アルジェリアにおけるフランス軍の侵略に対する抵抗運動 (1832-47) を指導し、その過程でアルジェリアの3分の2の領土を統一したことで知られる。1847年、彼はアレクサンドリアまたはパレスチナのアカへの移送の約束をフランス軍と取り交わして降伏した後、この約束に反して仏政府によって拘束された (1848-52)。他方ナポレオン3世による解放の後、亡命先のダマスカスで彼はイブン・アラビー学派のスーフィズムを探求し、その集大成である神秘主義の書、『諸階梯の書』¹⁾ を著すとともに、イスラーム改革主義者の育成者となった。現在ではアブドゥルカーディルについてアルジェリア・ナショナリスト [Madanī 1931; Yacine 1948; Boutaleb 1990] による、建国の父との位置づけが強固であるが、これまで軍事 [Berbrugger 1838; Daumas 1851]、スーフィズム [al-Murābiṭ 1966; Chodkiewicz 1982]、イスラーム改革主義の側面 [al-Jazā’irī 2002; Weismann 2006]、アラブ・ナショナリズム [King 1992] 等の側面から多くの伝記、研究書が出版されてきた。さらには彼についての表象は絵画、詩、小説等、非常に多岐に及んできた。その背景はこの人物のもつ多様な側面による複雑さにある。

歴史研究者、アフメド・ブーイエルデン (Ahmed Bouyerdene)²⁾ による本書、『アブドゥルカーディル——相反するものの調和』は、彼の生涯と思想について歴史記述と併せその精神的次元を対象とすることで包括的な記述かつ詳細な分析を試みる。スーフィズムの専門家であり多くの研究があるエリック・ジョフロワ (Éric Geoffroy)³⁾ は序文において、オリエンタリズムによって彼がイスラームやスーフィズムと無縁とされたことを問題視し、彼の一連の行動を、それらと関連付け、さらに自らの置かれた状況を受け入れた信念と精神性において理解する必要があると主張する [p. 10]。昨今として、彼のメッセージの持つ現代性 (l’actualité) についての敷衍的解釈は、アルジェリア

1) 『諸階梯の書』の初版は1911年カイロにおいてであり (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Wa’z wa al-Irshād*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Shabāb, 1911)、1966年ダマスカスで再版された (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Taṣawwuf wa al-Wa’z wa al-Irshād*, 3 vols, Dimashq: Dār al-Yaqza al-‘Arabiya lil-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1966)。研究書は以下を参照 (Jawād al-Murābiṭ, *al-Taṣawwuf wa al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Ḥasanī al-Jazā’irī*, Dimashq: Dār al-Yaqza, 1966; ‘Emir Abd el-Kader, *Écrits spirituels* (*Kitāb al-mawāqif*), Michel Chodkiewicz (présenté, traduit et annoté), Paris: Éditions du Seuil, 1982; Abd al-Qādir al-Djazā’irī, *Le Livre des Haltes* (*Kitāb al-Mawāqif*), Tome 1-3, Michel Lagarde (présenté, traduit et annoté), Leiden, Boston, Köln: Brill, 2000)。

2) 著者は『同時代人によるアブドゥルカーディル——肖像の断片』を既刊 (*Abd el-Kader par ses contemporains: fragments d’un portrait* (Préface du Cheikh Khaled Bentounès), Paris: Ibis Press, 2008)。

3) ジョフロワはスーフィズムとジハードについての著作がある (Éric Geoffroy, *Jihād et contemplation: vie et enseignement d’un soufi au temps des croisades, suivi de la traduction de l’Épître sur l’Unicité Divine de cheikh Arslān*, Beyrouth: les Éditions Albouraq, 2003)。

史再考の流れとも呼応し、彼の生涯・思想に関する多くの専門書の出版、シンポジウムや企画展の開催が行われてきた⁴⁾。アブドゥルカーディル生誕200年を記念する年に出版された本書もこのような現代の潮流にあり、彼を再考する動きはますます盛んになっているといえよう。以下、本書の各章の内容を要約する。

本書は1883年5月25日、ダマスカスでのアブドゥルカーディル死去の場面を描く、第1章「最後の息(L'ultime souffle)」から始まる。多くの人々が彼の葬儀に参列し、その訃報が多くの欧米の新聞によって報じられたことから彼は「かつて世界をその名で埋め尽くした人物」、つまり生前にすでに伝説が確立した歴史上の主要人物として読者に紹介される。同時に本書の導入部で概括される彼の生涯は、精神的次元と現世的次元において絶え間ない瞑想によって政治的行動を育んだ、抵抗運動を戦った兵士(guerrier)かつ聖者(saint)として提示される。

第2章「定着(L'enracinement)」では、アブドゥルカーディルの生い立ちにおける精神的要素と現世的要素との密接な関連が述べられる。まず、彼の家系における預言者の系譜(sharif)⁵⁾とカーディリー教団の系譜という、二重の系譜(double filiation)の重要性が述べられる。次に教団の修道場(ザーウィヤ, zāwiya)が、宗教的・神秘主義的教育とともに、精神的鍛錬と人格の完遂を目的とする礼儀作法の実践(al-ṣāliḥāt)を行っていたことが指摘される。3番目に著者は彼のマッカ巡礼(1827-29)をイスラームにおける義務行為のみならず、スーフイズムにおける入門の旅(voyage initiatique)を意味するものとしても解釈する。たとえば彼の身に着けた巡礼の白装束は神のもとへの帰還、すなわち自我(ego/nafs)の死、カアバ神殿の周回(al-tawāf)は自らの実在の消滅(al-fanā)である。同時に彼の旅の体験は、様々な人々との交流により、イスラームの地の現状認識とも両立していた⁶⁾。以上の点から彼の精神性は、彼を育んだ自然、文化、精神、人間性において現実世界と両立した形で形成されたものとして示される。

第3章「戦う聖者(Un saint combattant)」において、アブドゥルカーディルが1830年フランス軍のアルジェ占領に対する抵抗運動の信徒たちの長に選出されたことから、歴史に登場した彼の言説について述べられている。著者は、まず彼の名声の獲得が皮肉にも侵略戦争における敵側のフランスによる形成であり、ジハードの指導者としての使命と、スーフイー、すなわち「数珠の人(homme de chapelet)」の使命が根本的に対立するものである、という二重の矛盾を指摘する[p.48]。フランス軍は彼のイメージを、抵抗運動初期の軍部による「野心的」、「狂信的」という評価から、彼の優位を認める2度の和平協定にみられる政策の矛盾とあいまって高貴さ、指導力の高さ、聖性、カ

4) 彼についての企画展が2003-4年にフランスで複数回開催された。カタログには以下がある。

Abd el-Kader et l'Algérie au XIX^e siècle dans les collections du musée Condé à Chantilly, catalogue de l'exposition au Jeu de Paume du musée Condé à Chantilly du 22 février au 21 avril 2003 (prolongation jusqu'au 11 mai 2003), Paris: Somogy Éditions d'Art, 2003; *Un héros des deux rives: Abd el-Kader, l'homme et sa légende, catalogue de l'exposition à l'Hôtel de Soubise du 25 février au 23 juin 2003*, Paris: Centre Historique des Archives Nationales, 2003; *L'émir Abd el-Kader, un homme, un destin, un message, catalogue de l'exposition à l'Institut du Monde Arabe du 26 mai au 14 juin 2003*, Paris: Lemessage, 2003; *Abd el-Kader le Magnanime, études pour un portrait, catalogue de l'exposition de Jacques Paris, du 14 novembre 2003 au 15 février 2004*, Gap: Musée départemental, 2004; *L'Emir Abd el-Kader à Amboise, 1848-1852, catalogue d'exposition au Château Royal d'Amboise du 16 octobre 2004 au 14 novembre*, Amboise: Fondation Saint-Louis, 2004.

5) アラビア語転写表記は、『イスラーム辞典』(2002)に準ずる。

6) 旅程において彼が訪れた地名はスーフイズムと関連付けて提示される。例えば、アレクサンドリアは、スーフイーの精神的な停留所(halte)、シャーズイリー教団創始者の後継者ムルスイーの廟で特徴付けられ、タンターは守護聖者バグダウィーの廟を擁し、ダマスカスではシェイフ・アルスラーン、イブン・アラビーの廟を参詣、ナクシュバンディー教団へ入信し、バグダードではカーディリー教団創始者の廟を参詣した。この旅程については、彼の自伝の中で述べられている(al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī, *L'émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*, H. Benmansour (tr.), Paris: Dialogues édition, 1995, pp.56-59, 68-69)。

リスマ性で特徴付けられる、ほぼ崇拜対象ともいえるイメージに変化させた。さらにこれらの言説は、彼の小ジハード (al-jihād al-ṣaġhīr) への関与を、内的な態度の表明、精神的な次元での大ジハード (al-jihād al-akbar) であると示唆するものでもある。

第4章「解放の禁欲 (Une ascèse libératrice)」では1847年の彼の敗北、フランスでの拘留における、彼の苦悩とそれを克服する宗教実践にみられる彼の精神的次元の深化について述べられている。彼は政治的役割の放棄、政治的な死 (la mort du politique) を表明した後、自らがアルジェリア征服の道具と化すことを危惧し、拘留への抗議として断食を継続し、外出を拒否した。著者は彼のこの態度をスーフィズムの思想の実践としての禁欲 (zuhd)、精神的な隠遁 (khalwa) と位置づける。彼の禁欲は1852年10月16日、将来のフランス皇帝となる、ルイ・ナポレオンがアンボワーズ城を訪問し、解放を宣言するまで続けられた。第5章「事実に耐えられる倫理 (Une éthique à l'épreuve des faits)」では、フランス人捕虜虐殺 (1846) を彼が執行したとの嫌疑による彼の苦悩と、文明化の使命 (mission civilisatrice) の名の下でアルジェリアにおける残虐行為を正当化したフランスの態度について述べられる。アブドゥルカーデイルの態度は捕虜の扱いに丁重であり異なる宗教を尊重しており、彼の嫌疑は冤罪であるといえる。これこそがフランス軍に欠けていた倫理であった。その後彼が移住したダマスカスでは、1839年ギュルハネ勅令の発布によるムスリムの特権喪失の不满から、1860年にムスリム暴徒によるキリスト教徒への大規模な暴行事件が勃発した。彼はムスリムを諫めるとともに12,000名ものキリスト教徒を救済した。その偉業は欧米各国から賞賛され宗教の本質に達したとする評価もある一方、彼の名声を利用しようとする政治的戦略もみられた⁷⁾。著者はこの行動について、列強の中東介入を阻止するための彼の政治的配慮であったとする一方で、その動機はスーフィーとしての彼の内面的探求、神の命令への服従によるものと位置づける。

第6章「時の人 (Un homme de son temps)」においては、異文化との接触の中で培われた彼の思考の柔軟性が、熟考の重視、既存の意見への盲従を非難するイジュティハードの実践 [p. 139] として示される。まず抗仏ジハードにおいて世界最強の軍隊、フランス軍の技術力と組織工学を採り入れた点において、彼の稀有な実用主義が明らかである。その後フランスでの虜囚と滞在において、様々な訪問客と対話し、肖像画のモデルやカメラの被写体となり、オペラ鑑賞、社交界のサロン、3度の万国博覧会に出席するなど、彼の異文化受容、西欧の科学技術に対する好奇心が明らかになる。とりわけ1869年に工事が終了した紅海と地中海をつなぐスエズ運河——形而上学的に2つの世界または2つの現実の媒体 (isthme des isthmes/barzakh al-barāzikh) としての意味を含む⁸⁾——に対して彼は公共の福祉に役立つ科学技術に対する感銘を抱き、工事責任者レセップスとも交流した。このような彼の態度は、科学技術を媒介とした東洋と西洋の理想的な関係を示すものであり、宗教の原則から逸脱することなく信仰と実践を培った適応 (adaptation) の例として示される。彼はその著作の1つ、『知性ある人への喚起 (Rappel à l'intelligent)』⁹⁾において、科学的知識と信仰の両方が創造主である神を讃えることを目的とし、それらが両立することを主張する。同時に彼の態度は、近代化を非宗教化の過程と定義する19世紀西欧と、全ての革新を異端 (bid'a) とし信仰が硬

7) Charles-Robert Ageron, "Abd el-Kader souverain d'un royaume arabe d'Orient", *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 8(1), 1970, pp. 15-30.

8) スエズ運河建設におけるスーフィズムの含意の指摘は Étienne (1994) にみられる (Bruno Étienne, *Abdelkader Isthme des isthmes/ barzakh al-barazikh*, Paris: Hachette, 1994)。

9) *Dhikrā al-'Āqil wa Tanbīh al-Ghāfil/ Le livre d'Abd-el-Kader intitulé: Rappel à l'intelligent, avis à l'indifférent: considérations philosophiques, religieuses, historiques*, Gustave Dugat (tr.), Paris: B. Duprat, 1858.

直化したものとして示されるイスラーム世界、これら双方に対する問題を喚起するものとして示される。

第7章「達成 (L'accomplissement)」において、知的側面と体験的側面における彼の円熟の境地について述べられる。まず、イブン・アラビーの大著『マッカ啓示』に対する彼の注釈は、彼の高度な学識と精神的段階を示すものであり、この著作によって彼は近代における最高のイブン・アラビー解釈者の一人とみなされている¹⁰⁾。次に1863年に行ったマッカでの修行・巡礼における筆舌に尽くしがたい恍惚、直観の神秘体験は、詩や形而上学的解釈の書『諸階梯の書 (Kitāb al-Mawāqif)』において述べられるものとされる [p.165]¹¹⁾。マッカでの修行以前にすでに神を識る者 (ārif) であったアブドゥルカーディルは、修行における自我の消滅、臨終にも近い苦しみの体験を通じて『諸階梯の書』のテーマとなる存在論を醸成し、至高の段階である神の唯一性 (tawhīd) を自らのうちに実現したのであると述べられる [p.191]。

第8章「統一の人 (L'homme de l'unité)」においては、彼の宗教間対話 (エキュメニズム) の側面が述べられる。彼は抗仏戦争時の諸部族の統合、キリスト教司祭との対話、マッカ巡礼後のフリーメーソンへの加入により異なる要素の統合を試みたことから、啓典の民に共通の手本となるアブラハム的人物として位置づけられる。創造者である神が被造物の中に属性として現れ、それぞれの属性は被造物においてそれと正反対の属性によってのみ存在し、それら相反する属性の相互作用が生命の脈動を生み出す。預言者ムハンマドはこうした反対物の調和の体現者であり、神の代理人の後継者である完全人間 (insān kāmil) の原型とされる。アブドゥルカーディルはムハンマドの継承者 (wārith muḥammadī) であり、同時に完全人間と位置づけられるのである。

結論「アブドゥルカーディルの遺産 (Le legs d'Abd el-Kader)」において著者は、自らをアブドゥルカーディルの精神的、知的、政治的、人間的遺産の後継者とする後世の言説が、彼の態度の変遷と折衷主義 (éclectisme) を無視し、彼の人格を唯一つの側面へと還元することによって、偏った人物描写をしがちであるという問題点を喚起する。彼の一生が他に類を見ないものであったことは確かであるにせよ、英雄、聖者としてのみの表象は、彼を接触不可能な「非人間化 (déshumanisant)」に至らしめる。むしろ著者は、人間としての生における試練を各瞬間での絶え間ない努力によって昇華させる術によってこそ、彼は英雄であると位置づける。本書は彼を戦争の敗北という挫折、アンボワーズでの同伴者の死を通じた苦悩やその克服を描写することを通じ、一人の人間像として描き出す。その描像は近現代アルジェリアにおける国家のシンボルとしての神格化、一枚岩的理解に対する批判を含意している¹²⁾。

本書の評価すべき点は資料解釈の斬新さである。そのことを3つの側面から述べてみたい。第1に、アブドゥルカーディルを現在の国際協調、相互理解の枠組みの中で東洋と西洋、イスラームとキリスト教の対話の象徴として位置づけている点である。注目すべきは、彼と彼についての証言者

10) 彼は『マッカ啓示』のカイロ版 (*al-Futūḥāt al-Makkīya*, al-Qāhira, 1852[1274]) を、弟子に写本と校合せ、校正点を指摘させた。

11) 詩集 *Émir Abd el-Kader, L'Algérien, Poèmes métaphysiques*, Charles-André Gilis (présenté, traduit et annoté), Paris: Les Editions de l'Œuvre, 1983 として刊行されている。

12) 著者は以下のように本書を締めくくっている。「彼 [アブドゥルカーディル] が早くも 1832 年秋に道標を建て、ようやく 130 年後に日の目を見た、彼のアルジェリアにおける主権国の計画に対して疑いの反応があったように、調和した人間性における彼の信念は現実化に至らないのであろうか。アブドゥルカーディル・アル・ハサニーは明らかに新しい時代を予告しているのである [p.227]。」

たちとの間の双方向的な相互理解を描いていることである。本書で彼は、オリエンタリズムが提起するような一方的な叙述の客体としてではなく、彼自身の他者理解、異文化理解の視点によって他者を認識する主体として提示されている。

第2に、様々な証言に彩られる彼の生涯を精神的次元の視点から捉え直すという点が挙げられる。例を挙げると彼の拘留時の言説から明らかにされる、彼の異文化に対する拒絶から受容という意識の変容は、フランス側に対する妥協的態度の現れとしてのみならず、主体的な意義をもつものと位置づけられる。さらに彼の思想的次元を史実に基づいた現実レベルで解釈することで、彼の思想と行動について包括的な理解を可能とする。「美的である以前に、精神と現世、優雅と厳格、行動と熟考、近代性と伝統、これらのすぐれた調和は、スーフィーであるアブドゥルカーデイルの内的な現実を反映している [p. 220]」といった具合に、彼の表象は複雑な精神的次元の具現化として理解される。

第3に、アブドゥルカーデイルの思想・行動を現代にも通じるものと解釈する視点である。著者は彼がフランス社会に適応し同時に思想を深めていった事例を指摘し、ムスリム女性のヴェールの着用を絶対視していなかったことを採り上げる。この点は政教分離を説くフランス国内でのムスリムの問題を示唆する多分に現代的な解釈といえる。

このようにアブドゥルカーデイルと他者との相互の視点の導入、彼の精神的次元についての叙述、現代性を汲み取っている点において高く評価できる本書であるが、なお問題としよう点があるように思われる。それらを3点に分けて指摘する。

第1にアブドゥルカーデイルがイジュティハードの実践者であるとの著者の主張は、自らの熟考の努力によりイスラームを形骸化させなかった理想像として提示され、多くの事例によって裏付けられるかもしれない。しかし実際に彼がイジュティハードを主張していたのかどうかについては疑問が残る¹³⁾。したがって、第6章で述べられるアブドゥルカーデイルと伝統的ウラマーの意見の相克は、イジュティハードをめぐる問題としてではなく、伝統墨守に対する立場の相違として理解されるべきであろう。

第2に、本書でテーマとされた彼の精神性が議論の余地のない崇高さをもって述べられていることが、批判の余地をなくしている点が挙げられる。彼自身の評価を過度に肯定的なものとするのは、別の意味で一面的な像を創出しているのではないかと懸念が抱かれる。

第3に、彼がナショナリズムのなかで国家の象徴とされていく過程について言及が薄いという点である。アブドゥルカーデイルの降伏後、多くの抵抗運動がフランスによって鎮圧され、結果的にアルジェリアはフランスの植民地となった。彼についての言説・表象はこのようなアルジェリア・ナショナリズムの文脈において捉えられることが通例であるが、本書はこうした点についての言及を避け、ほぼ19世紀西欧の資料をもとに構成されている。原著者は本書においてアブドゥルカーデイルを、異なる要素を自らの努力によって調和させる理想的な人間像として描いている。彼の精神性の評価を通じて描かれる西欧とイスラームの間の開かれた関係は、現代の要請に沿ったものであろう。しかし本書の記述が19世紀西欧の言説の域を出ないまま、アルジェリアとフランスの歴史認識の相違、フランスにおける移民の問題等現状の問題を無視し、彼の現代における理想的な位置づけに一足飛びに向かっている点は、理想化された過去を可能性に満ちた未来に結びつけることに過ぎない。

13) 『諸階梯の書』第121階梯においてアブドゥルカーデイルは、法源学におけるすべてのムジュタヒドは害悪であり、不信仰と結びつき、精神世界(‘aqliyat)の中にあり権威をもたないとして、イジュティハードの実践に対して否定的である(Jazā'irī 1966, pp. 264-265)。Commins (1988)も彼がイジュティハードを推進していたとの見方に消極的である(David Commins, “Abd al-Qādir al-Jazā'irī and Islamic Reform”, *The Muslim World* 78 (2), 1988, pp. 121-131)。

引用文献

- Ageron, Charles-Robert, “Abd el-Kader souverain d'un royaume arabe d'Orient,” *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 8(1), 1970, pp. 15–30.
- Berbrugger, Louis-Adrien, “Voyage au camp d'Abd-el-Kader, à Hamzah et aux montagnes de Wannourhah (province de Constantine), en décembre 1837 et janvier 1838,” *Revue des deux mondes* 15, 1838, pp. 437–471.
- Boutaleb, Abdelkader, *L'Emir Abd el-Kader et la formation de la nation algérienne: de l'émir Abd el-Kader à la guerre de libération*, Alger: Éditions Dahlab, 1990.
- Bouyerdene, Ahmed, *Abd el-Kader par ses contemporains: fragments d'un portrait* (Préface du Cheikh Khaled Bentounès), Paris: Éditions Ibis Press, 2008.
- Commins, David, “‘Abd al-Qādir al-Jazā'irī and Islamic Reform,” *The Muslim World* 78(2), 1988, pp. 121–131.
- Daumas, Eugène, *Les chevaux du Sahara*, Paris: Chamerot, 1851.
- Étienne, Bruno, *Abdelkader: Isthme des isthmes/ barzakh al-barazikh*, Paris: Hachette, 1994
- Jazā'irī, al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Taṣawwuf wa al-Wa'z wa al-Irshād*, 3 vols, Dimashq: Dār al-Yaqza al-‘Arabīya lil-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1966.
- (Émir Abd el-Kader), *Écrits spirituels (Kitāb al-mawāqif)*, Michel Chodkiewicz (présenté, traduit et annoté), Paris: Éditions du Seuil, 1982.
- (Émir Abd el-Kader, L'Algérien), *Poèmes métaphysiques*, Charles-André Gilis (présenté, traduit et annoté), Paris: Editions de l'Œuvre, 1983.
- , *L'émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*, H. Benmansour (tr.), Paris: Dialogues Éditions, 1995.
- , *Le Livre des Haltes (Kitāb al-Mawāqif)*, Tome 1-3, Michel Lagarde (présenté, traduit et annoté), Leiden, Boston, Köln: Brill, 2000.
- Jazā'irī, Badī'a al-Ḥasanī al-, *Wa mā Baddalū Tabdīlan (“Would Never Change”): Tafāṣīl Daqīqa ‘an Jihād al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā'irī wa Dawlatih wa-Hijratih (Assistance of MAM: Municipal Administration Modernisation and Financed by EU, Related to Restoration of Amīr's Palace at Dummar in Damascus)*, al-Ṭab'a 2, Dimashq: Dār al-Fikr, 2002.
- King, John, “Abd el-Kader and Arab Nationalism,” in J.P. Spagnolo (ed.), *Problems of the Modern Middle East in Historical Perspective*, London: Ithaca Press, 1992, pp. 133–149.
- Madanī, Aḥmad Tawfīq al-, *Kitāb al-Jazā'ir: Tārīkh al-Jazā'ir ilā Yawminā hādhā wa Jughrāfiyatihā al-Ṭabī'īya wa al-Siyāsīya*, al-Jazā'ir: al-Maṭba'a al-‘Arabīya, 1931.
- Murābit, Jawād al-, *al-Taṣawwuf wa al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Ḥasanī al-Jazā'irī*, Dimashq: Dār al-Yaqza, 1966.
- Rāsī, Jūrj al-, *al-Dīn wa al-Dawla fī al-Jazā'ir: min al-Amīr ‘Abd al-Qādir ...ilā ‘Abd al-Qādir*, al-Jazā'ir: Dār al-Qaṣba lil-Nashr, 2008.
- Yacine, Kateb, *Abd el-Kader et l'indépendance algérienne*, Algiers: Al-Nahdha, 1948.
- Weismann, Itzhak, *Taste in Modernity: Sufism, Salafīyya, and Arabism in Late Ottoman Damascus*, Leiden, Boston, Köln: Brill, 2006.

(柄掘 木綿子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Azhar-ul-Haq Lodhi. 2009. *Understanding Halal Food Supply Chain*. London; HFRC Ltd, 225pp.

ハラールとは「許された」「合法である」を意味するアラビア語に由来しており、その反対が「禁じられた」「非合法の」意味をもつハラームである。ある物や行為がハラールかそれともハラームかというイスラーム法学上の問題は、ムスリムの生活全般にとって重要な意味を持つ。食品に関して言えば、伝統的にはイスラーム圏では、食品はその地域で生産されるものが多く、食品のハラール性（イスラーム的な適格性、合法性）が問題とされることはなかった。しかしながら、1970年代以降、非イスラーム圏からの輸入肉や加工食品の流入が増加してきたことにより、イスラーム圏の食品市場ではハラールに関しての規制が強まっていき、ハラール食品市場やハラール認証制度が勃興してきた。

ハラールに関する研究は、1990年代以降にハラール食品市場が次第に拡大していくとともに急速に盛んになってきた。研究分野として食品科学や畜産分野の研究が多く、具体的には、食品添加物、遺伝子組み換え食品のハラール性に関する問題や、さらには、イスラーム法による屠殺についての議論などが論じられている。また2000年に起きたインドネシアでの「味の素事件」を期に、ハラール認証制度やハラールサプライチェーンの認識の重要性が増してきた。現代ハラール食品産業では、生産工程のみならず、製品の流通から消費にいたる全過程で、そのハラール性が問題にされるようになっており、その過程はきわめて複雑化している。そのため、近年ではこの複雑化したハラールサプライチェーンに焦点を当てた研究がなされるようになってきた。

本書は、近年、急激に勃興してきたハラール食品産業のサプライチェーンや食品科学を体系的に理解するための概説書である。本書に類する研究に、食品科学分野に特化したハラール食品産業の概説書である[Riaz 2004]があるが、これと比較して、本書はハラールサプライチェーンやハラール食品産業の歴史的経緯の記述に詳しく、従来の研究よりも格段に、ハラール食品産業全体を見通すことができるよう工夫している点に特徴がある。著者であるAzhar-ul-Haq Lodhiはロンドン大学で植物バイオテクノロジーの博士号を取得した後、大学や民間企業で遺伝子組み換え食品の研究に従事した経験を持つ。現在はイギリスを拠点として、独立したハラール食品研究のコンサルタントを行っている。

本書は9章から構成されており、1章でイスラームの食規定を説明し、2-4章ではハラール食品市場とハラール認証制度を取り上げている。5-8章では主に食品科学分野に焦点を当て、動物由来の食品から遺伝子組み換え食品のハラール性について述べている。最終章の9章では今後、ハラール食品産業が発展していくためにどのような研究やトレーニングが必要であるかについて述べられている。以下、各章を概観していく。

第1章ではイスラーム法学とイスラームの食規定について記述される。ここでは食品のハラール性を判断する際のイスラーム法学の役割を説明したうえで、ハラールがイスラームにおいてどのような食規定であるかを詳細に説明している。

第2章ではハラール食品市場の規模をムスリムの人口規模と購買力の観点から示している。まずは各国別のムスリム人口の概観について述べ、次に、ムスリムの購買力と食費への支出額が各国別に述べている。人口に関しては2025年と2050年に関する予測もなされており、将来的にムスリム人口はアジアやアフリカで爆発的に増大すると予測されている。著者はこのような状況に即して、

将来的なハラール食品市場がよりいっそう大規模なものになるであろうと推測する。

第3章では、食品認証の役割と歴史を示したうえで、ハラール認証の形成過程について述べる。食品の安全は、食に関して最も重要であり、現代では生産から小売りまでの段階に、加工や保存、輸送など様々な局面が介在し、各段階において安全性が求められている。このような複雑化した食品の安全性を一目で判断するために導入されたのが認証制度である。ここでは、産業革命以後のイギリスやアメリカでの食品の認証制度の発展の歴史と国際的な食品認証機関である国際食品規格委員会 (Codex Alimentarius Commission: CODEX) や国際標準化機構 (International Organization for Standardization: ISO) などの歴史や役割について詳細に述べられている。このような国際的な食品認証の形成のもとに、東南アジアを中心とするイスラーム世界での、食品のハラール性を保証するハラール認証制度の形成過程についても述べている。そして現在進行中である世界的なハラール認証統一への動きについても触れている。

第4章では生産、加工、輸送、保存、小売りのフードチェーンの各段階でのハラール性を保証する HCP (Halal Control Point) について述べられている。現代の食品産業は多くの段階を経ており、それぞれの段階での安全性を保証する必要がある。ハラール認証の先導国であるマレーシアは2004年にハラールサプライチェーンの各段階に HCP を導入した「マレーシア標準 1500 (ハラール食品 — 生産、調整、取り扱い、および、貯蔵 — 一般指針)」(Malasian Standard MS 1500: 2004, Halal Food — Production, Preparation, Handling and Storage — General Guidelines) というハラール認証制度を制定した。現代ハラール産業ではこの認証制度が要諦になりつつあり、今後はよりいっそう、HCP の徹底、精緻化がなされていくと予想される。

第5、6章では動物由来の食品と植物由来の食品についてのハラール性について述べられている。原則的にイスラームでは植物由来のものは一般的に全てハラールであるとされている。一方、動物由来の製品には十分注意を要する。イスラームでは豚、死肉、イスラーム法に則った屠殺がなされていない肉が禁止されている。ここでは、食肉製品における、生産、輸送、屠殺、保存、小売りの各過程でのハラール性について述べられている。現代では先進国を中心に様々な失神、屠殺方法が確立されているが、その屠殺方法をイスラーム諸国が認めないといった問題も起きている。この章ではそういった問題にも触れながら、イスラーム諸国で一般に認知されている食肉供給体系における HCP を考察している。

第7章では食品加工におけるハラール性について述べられている。現代ハラール産業の一番の課題は、この食品加工における段階であろう。第二次世界大戦以降、食品の保存性を高める技術は格段に向上し、現在では食品加工の段階においてさまざまな成分が介在する。そのため、加工食品企業がハラール食品を生産する際には、ハラール性をクリアするために多くの食品科学の知識が要求されることになる。本章では主に食品添加物、ゼラチン、アルコールを具体例としながら、そこで問題となるハラール性を検証している。

第8章では、バイオテクノロジーの中でも特に、遺伝子組み換え技術をいかにイスラーム法に適応させていくのかについて考察がなされている。著者は遺伝子組み換え技術は非常に有用な技術であるため、イスラーム法学者は食品科学の知識なしに、一方的に規制を加えるべきではないという立場をとっている。しかし、近年導入された遺伝子組み換え食品は、長期的な摂取が人体に与える影響なども未知数でリスクがあるともいえる。このような状況に際し、著者はハラール性や安全性に疑義のある遺伝子組み換え食品は避けるべきであると述べている。

第9章では、ハラール食品産業がこれから適切な方向に発展していくための研究方法やトレーニ

ングについて述べられている。著者が強調している点は、イスラーム法学と食品科学の両分野の理解である。イスラーム法学者が、現在の複雑化したフードサプライチェーンや、食品科学などを理解しないままファクターを下すことの危険性を指摘している。透明性の高いハラール認証制度で定評のある東南アジアでは、食品分野の専門家とイスラーム法学者、双方が協力しハラール認証体制を構築している。著者の指摘は、ハラール認証制度にそれほど積極的でない南アジアや中東などの地域に当てはまると考えられる。

本書が今後のハラール研究に貢献する意義としては三点挙げられる。一点目は、イスラーム法学と食品科学・食品産業の両分野を架橋する役割を果たしていることである。著者はハラール食品産業の持続的な発展には食品学、イスラーム法学両分野に精通することが必要であるとの観点から、イスラームにおける食規定をはじめとして、ハラールサプライチェーン、ハラール認証制度の概要、遺伝子組み換え食品といった分野まで幅広く概説している。これにより、イスラーム法学者が食品分野への知識を深め、食品科学者がイスラーム法の知識を深めることが可能になっている。

二点目は、ハラールサプライチェーンの理解に新たな要素を加えたことである。従来のハラールサプライチェーンは生産や加工といった段階に焦点が当てられてきたが、近年ではその範囲が拡大し、生産物から加工、小売業までのすべての段階が認証の対象になってきている。本書では、輸送、保存そして小売りといった段階においても解説がなされており、現代のハラール食品産業の要諦の大部分をおさえることに成功している。

三点目は、消費者－生産者間の食品安全の問題を解決するための方策を提示している点である。現在のハラール食品産業の担い手は主に多国籍食品企業、アグリビジネスや非ムスリムの事業者たちである。このような状況の中、食品を供給する側の多国籍企業と、食品を消費する側のムスリムの間には「食品の安全性／ハラール性」に溝がある状態である。この溝を埋めるための方策として、著者は食品科学分野の研究・トレーニングの充実と、最新の食品分析機器を用いた食品検査体制の構築の必要性を述べており、消費者と生産者の間にある食品安全の溝を埋めようとしている点で高く評価できる。

本書はハラールサプライチェーンというマクロな切り口から、ハラール食品産業の全体を明瞭に捉えた良書である。しかしながら、本書で示されたハラールサプライチェーンはシャーフイー法学派に則ったマレーシアがモデルである。そのため、法学派が異なる中東諸国にはこのモデルの適用が難しいことが予測される。今後の課題として、各地域それぞれのフードチェーンの個別事例を検討したうえで、法学派の差異を考慮に入れたハラールサプライチェーンのモデルを再構築していくことが挙げられるだろう。

参考文献

Riaz, M.N. and Chaudry, M.M. 2004. *Halal Food Production*. Boca Raton: CRC Press.

(川畑 亜瑠真 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)